

4. 第2面の調査

(1) 概要 (図版75 写真図版61・62)

概要 IV区第2面は、調査区には全域に遺構が密に分布している。竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡15棟、土坑約40基、溝約50本を検出している。遺構の時期は弥生時代前期から平安時代までである。

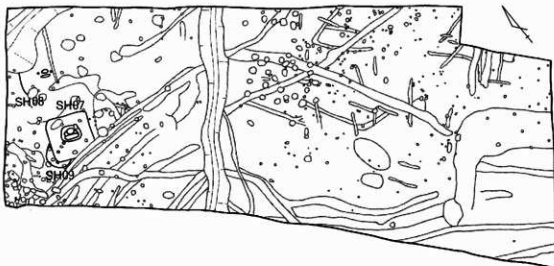
調査区西隅付近は特に遺構が集中し、複雑に切り合っている。弥生時代の竪穴住居跡はいずれも調査区の西端付近に位置し、弥生時代の土坑もその近辺に多く分布する。

この調査区は、中央よりやや西を調査区に直交して、東に約45°傾いて流れる奈良時代から平安時代の溝SD86によって大きく二分されている。複雑に切りあう掘立柱建物も、この溝をはさむ二群に大別できる。ただし両群とも調査区外に続いており、それぞれの建物群の配置などは明らかでない。また、このSD86に切られる溝SD70・SD100あるいはSD65・SD88・SD89・SD95・SD98・SD101はいずれも東西方向に流れている。SD83・SD84あるいはSD71は、上記の溝とはまた異なる方向性をもっている。これらの溝の多くは奈良時代の遺物が出土しており、この時期には地割りが目まぐるしく変遷したことを示している。なお、調査区南隅のSD61周辺では飛鳥時代の遺物が比較的多く出土している。



第107図 IV区第2面

1. 住居跡 (図版76)



第108図 IV区第2面 住居跡

SH07 (図版77 写真図版63・64・182)

検出状況 調査区の西側で検出している (第108図)。SH09を切っているが、南側はSD87によって切られ、遺構の残存状況はやや悪い。

住居内の西側には円弧状の溝が認められるが、これを円形住居の周壁溝と考えると、同じ場所でも円形から隅丸方形に建て替えられた可能性もある。

形状・規模 平面形は隅丸方形を呈し、建物の方位を中央土坑の主軸を基準とするとN66°Eを示す。規模は一辺4.65mで、各辺は北側4.45m、西側4.47mを測る。検出面から床面までの深さは13cmで、床面の標高は6.63mである。

検出した床面積は24.01㎡を測る。

埋土 中央土坑の部分を除いて、暗灰色極細砂1層からなる。

遺物は小片が出土したのみで、まとまって出土していない。

屋内施設 柱穴・周壁溝・中央土坑が検出された。

柱穴

合計5穴検出している。P1は掘り方径40cm、柱径22cm、床面からの深さ21cmを測る。P2は掘り方径28cm、柱径10cm、床面からの深さ45cmを測る。P3は掘り方径28cm、柱径15cm、床面からの深さ40cmを測る。P4は掘り方径35cm、柱径16cm、床面からの深さ28cmを測る。P5は掘り方径29cm、柱径13cm、床面からの深さ42cmを測る。以上の5穴が主柱穴を構成するものと考えられる。

主柱穴間の距離はP1～P2間が2.45m、P2～P3間が2.00m、P3～P4間が2.30m、P4～P5間が1.90m、P5～P1間が1.45mである。

いずれの柱穴からも特に遺物は出土していない。

周壁溝

周壁溝は削平された南側部分以外は全周している。床面での幅17.5cm、底の幅7.5cm、検出面からの深さ15.0cm、床面からの深さ5.0cmを測る。

中央土坑

土坑A・土坑Bの両方と、その両方を取り囲む土手が検出された。

- 土坑A** 規模は長さ163cm、幅30cm、深さ8cmを測り、面積は1.4㎡である。長軸の方向はN65°Wである。埋土は黒色極細砂質シルトであり、炭が多く含まれている。
- 土坑B** 土坑Aの南側に位置しており、平面形は楕円形で、規模は長さ87cm、幅58cm、深さ35cmを測り、面積は0.5㎡である。埋土は黒褐色極細砂質シルトであり、炭・マンガンが認められる。
- 土手** 中央土坑A・Bの両方を囲むように認められ、平面形は隅丸台形で、断面形は半円形で、基底部の幅は30cmを測る。床面との比高差は6cmである。
中央土坑A・B、及び土手を含めた面積は2.5㎡で、対床面積比は10%である。
- 出土遺物** 土器と石器が出土している。
- 土器** 直口壺の口縁部(534)が出土している。外面には4条の凹線紋が認められるが、その間隔は一定していない。
- 石器** S63は検出時に出土したサヌカイト製の有蓋式の石鏃である。長さ5.6cm、幅1.55cmと大型で、厚さも5.5cmと厚く、重さは3.8gある。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。
- SH08 (図版78 写真図版64・131・182)
- 検出状況** IV区の北隣付近で検出している(第108図)。SK35・SK36・SK47、SD96～SD98によって切られている。この一帯は土器や炭などを多く含む黒色土が広がり、遺構の検出は困難であった。そこでかなり土壌層を削りこんだため、住居跡の立ち上がりをごく一部確認したのみである。
- 形状・規模** 平面形はおそらく円形と推定される。主柱穴らしいものはいくつかあったが、方位は不明である。
規模は径約6m程度と推定される。検出面から床面までの深さは6cmで、床面の標高は6.74mである。検出した床面積は9.5㎡を測る。
- 埋土** 中央土坑の部分を除いて1層で、埋土は黒褐色シルト質極細砂である。
- 屋内施設** 柱穴・中央土坑を検出している。
- 柱穴** 合計8穴検出しているが、主柱穴の可能性のあるものは6穴である。P1は掘り方径34cm、柱痕径17cm、床面からの深さ8cmを測る。P2は掘り方径26cm、床面からの深さ22cmを測る。P3は掘り方径31cm、床面からの深さ16cmを測る。P4は掘り方径25cm、柱痕径10cm、床面からの深さ13cmを測る。P5は掘り方径29cm、柱痕径15cm、床面からの深さ6cmを測る。P6は掘り方径15cm、床面からの深さ41cmを測る。
主柱穴以外にも中央土坑に伴う2穴の柱穴が検出されている。P7は中央土坑の東側にあり、掘り方径23cm、柱痕径11cm、床面からの深さ4cmを測る。P8は中央土坑の西側にあり、掘り方径19cm、柱痕径12cm、床面からの深さ4cmを測る。
- 中央土坑** 土坑A・土坑Bの両方認められ、柱穴が両側に認められる。
- 土坑A** 土坑Bの南西側に位置しており、平面形は細長い瓢箪形で、規模は長さ125cm、幅12～20cm、深さ3cmを測り、面積は0.15㎡である。長軸の方向はN65°Wである。埋土は黒褐色砂質シルトであり、炭を含んでいる。
- 土坑B** 平面形は隅丸方形で、規模は長さ75cm、幅50cm、深さ30cmを測り、面積は0.3㎡である。

第5節 IV区の調査

埋土は黒褐色砂質シルトである。二段掘りになっており、上段で土器の大きな破片が出土している。

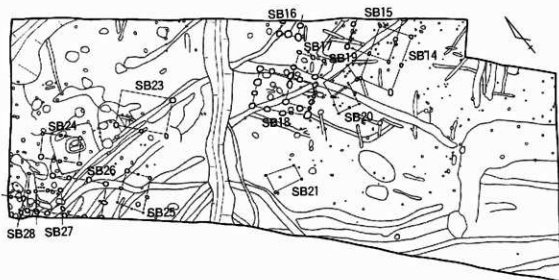
中央土坑A・Bを含めた面積は0.45㎡で、対床面積比は4%である。

- 出土遺物** 土器と石器が出土している。
- 土器** 器台(535)と脚部(536)が出土している。器台は、比較的小型で、SH01出土の器台とほぼ同タイプと考えられる。脚部内面をヘラ削りにより仕上げられている以外は、ナデ調整により仕上げられている。536については、器台あるいは高杯の脚部と考えられるが、ここでは高杯として報告する。
- 石器** S64はサヌカイト製の石鏃である。折損のため基部の形状は不明である。長さ2.05cm、幅1.65cm、厚さ0.25cm、重さ0.9g。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

SH09 (図版79 写真図版64)

- 検出状況** 調査区の西側で検出している(第108図)。SH07とSD87によって切られているが、平面的にはほぼ完全に検出できた。
- 形状・規模** 平面形はやや東西方向に歪んだ円形を呈している。主柱穴の方位はN62°Eである。規模は長径3.67m、短径3.28mを測る。検出面から床面までの深さは14cmで、床面の標高は6.56mである。
- 検出した床面積は9.4㎡を測る。
- 埋土** 中央土坑の部分を除いて、褐灰色シルト質極細砂の1層からなっている。
- 屋内施設** 柱穴・周壁溝・土坑が検出された。
- 柱穴** 合計3穴検出しているが、主柱穴は2穴である。P1は掘り方径44cm、柱径径16cm、床面からの深さ18cmを測る。P2は掘り方径30cm、柱径径14cm、床面からの深さ11cmを測る。以上の2穴が主柱穴を構成するものと考えているものである。
- 主柱穴以外にも1穴の柱穴が検出されている。P3は住居跡内の中心からややずれたところにあり、掘り方径32cm、柱径径11cm、床面からの深さ24cmを測る。
- 主柱穴間の距離は、P1～P2間が2.20mを測る。
- 周壁溝** 周壁溝は北側の一部以外は全周している。床面での幅8cm、底部の幅3cm、検出面からの深さ19cm、床面からの深さ5cmを測る。
- 土坑** P3のやや北側で検出された。長さ1m、幅66cmを測る。底部は楕円形を呈する北側部分と浅く平らな南側部分からなる。北側の深い部分は床面における短軸方向の幅25cm、床面からの深さ17cmを測り、南の浅い部分は床面における短軸方向の幅23cm、床面からの深さ11cmを測る。
- 埋土は上層が灰色シルト質極細砂、下層が褐灰色シルト質極細砂で、両層とも炭を含んでいる。
- 出土遺物** 甕の底部片2点(537・538)が出土しているにすぎない。両個体とも底部を指オサエにより成形しているが、体部の調整法は器表面の遺存状況がよくないため観察できない。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

II. 掘立柱建物



第109図 IV区第2面 掘立柱建物跡

SB14 (図版84)

検出状況 IV区中央部東側で検出した(第109図)。SB15と平面的に一部重複するが、その前後関係は明確にできない。

形状・規模 N59°Eに棟軸方向をとる、梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。南西・北東梁行方向で3.80m、北西桁行方向で6.25m、南東桁行方向で6.60mを測り、建物の面積は24.4m²である。桁行方向での柱穴間平均距離は、北西桁行で3.12m、南東桁行で3.30mである。

柱穴 掘り方の平面形は隅丸方形を呈し、掘り方の一辺33~60cm、柱径13~20cm、検出面からの深さ10cm~25cmを測る。

出土遺物 全く出土していない。

時期 柱穴の平面形・規模および建物の方位から判断して奈良時代と考えられる。

SB15 (図版81 写真図版65)

検出状況 IV区中央部東寄り、北西辺付近で検出している(第109図)。SD65を切っている。

形状・規模 N65°Eに棟軸方向をとる、桁行2間以上、梁行2間からなる建物である。南西桁行方向で5.00m、南東梁行方向で5.20mを測る。桁行方向の平均柱穴間距離は2.5m、梁行方向の平均柱穴間距離は2.6mである。面積は20.85m²である。

柱穴 掘り方の平面形は全て方形からなり、その規模は一辺38~60cmを測る。個々の柱穴の主軸方向と棟軸方向はほぼ一致している。深さは24~57cmである。掘り方内は褐色系の埋土からなる。一穴を除き柱痕を確認することができ、その径は14~20cmである。

出土遺物 全ての柱穴から土器が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期 小片のため出土土器から時期を特定することはできない。柱穴掘り方の平面形が方形を呈することから、奈良時代を中心とした時期と考えられる。

第5節 IV区の調査

SB16 (図版81・88)

- 検出状況** IV区中央、北西辺付近で検出しており(第109図)、調査区外へも続いている。
- 形状・規模** N50°Eに棟軸方向をとる、桁行2間以上、梁行2間からなる建物である。北側桁行方向で1.30m以上、西側梁行方向で2.35mを測る。桁行方向の平均柱穴間距離は1.28m、梁行方向の平均柱穴間距離は1.18mである。検出された面積は3.57㎡である。
- 柱穴** 掘り方の平面形は全て方形からなり、その規模は一辺58～70cmを測る。個々の柱穴の主軸方向と棟軸方向は一致しない。深さは13～20cmである。掘り方内は灰色系の埋土からなる。一穴を除き柱痕を確認することができ、その径は18～25cmである。
- 出土遺物** 540はP1より出土した土師器の坏Aである。口縁部の約1/8程度の小片で、推定口径9.9cmと最も小型のタイプである。二段の斜放射暗文をほどこす。端部は素直に丸くおさまられており、玉縁状に肥厚したり、巻き込んだりしない。
- 時期** 出土した遺物から奈良時代はじめ頃と考えられる。

SB17 (図版82・88 写真図版131)

- 検出状況** IV区の中央部、SB16の南西で検出している(第109図)。SD71を切っている。
- 形状・規模** N55°Eに棟軸方向をとる、桁行3間、梁行2間からなる建物である。南西側桁行方向で2.80m、北東側桁行方向で3.00m、北西側梁行方向で5.74m、北西側梁行方向で5.60mを測る。桁行方向の平均柱穴間距離は1.45m、梁行方向の平均柱穴間距離は1.89mである。検出された面積は17.3㎡である。
- 柱穴** 掘り方の平面形は2穴を除き方形で、その規模は一辺38～66cmを測る。円形のものは一辺22～42cmとやや小さい。個々の柱穴の主軸方向と棟軸方向は一致しない。深さは19～47cmである。掘り方内は灰色系の埋土からなる。3穴を除き柱痕を確認することができ、その径は16～24cmである。
- 出土遺物** 541はP1より出土した須恵器の坏Aである。1/2弱の破片で、推定口径13.4cm、器高は2.70cmと浅手のタイプである。底径と口径の差が大きく、口縁部の外傾度は高い。以上の特徴は、新しい様相を示している。外面に火ダスキ痕があり、歪んでいる。
- 時期** 出土した遺物から奈良時代後半以降と考えられる。

SB18 (図版82・88 写真図版65)

- 検出状況** IV区の中央部、SB16の南西で検出している(第109図)。SB17と重なっているが、切り合い関係はみとめられない。SD65・SD71を切っている。
- 形状・規模** N40°Wに棟軸方向をとる、桁行4間、梁行3間からなる建物である。西側桁行方向で6.60m、東側桁行方向で6.50m、北側梁行方向で4.24m、南側梁行方向で3.62mを測る。桁行方向の平均柱穴間距離は1.63m、梁行方向の平均柱穴間距離は1.31mである。面積は26.3㎡である。
- 柱穴** 掘り方の平面形は全て方形からなり、その規模は一辺46～72cmを測る。個々の柱穴の主軸方向と棟軸方向は一致しない。深さは19～56cmである。掘り方内は褐色系色の埋土からなる。各柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は12～26cmである。

出土遺物 須恵器の埴3個体(542-544)が出土している。
 時期 出土土器から判断して、平安時代中頃と考えられる。

SB19 (図版83)

検出状況 調査区中央部北東側で検出した。SD65の南側に位置する(第109図)。また、SB20の北側に位置し、本建物のP4がSB20のP7に切られている。また、SD71と平面的に重複するが、その前後関係は明確にしえない。

形状・規模 N80°Eに棟軸方向をとる、梁行1間、桁行2間の掘立柱建物跡であるが、北桁行方向の2穴を欠く。東梁行方向で1.92m、南桁行方向で3.36mを測り、建物の面積は6.47㎡である。南桁行方向における柱穴間の平均距離は1.68mである。

柱穴 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方径24-35cm、検出面からの深さ14-28cmを測る。P2のみ柱痕を検出したが、その径は16cmである。

出土遺物 P4から弥生時代中期の甕と考えられる小片が出土しているが、図化できなかった。
 時期 P4から出土した土器から判断して、弥生時代中期と考えたい。

SB20 (図版83)

検出状況 調査区中央部北東側で検出した(第109図)。SB19の南側に位置し、同建物のP4を当建物のP7が切っている。また、本建物についてもSD71と平面的に重複するが、その前後関係は明確にできない。

形状・規模 N15°Eに棟軸方向をとる、梁行2間、桁行2間の掘立柱建物である。ただし、北梁行方向の中央部の柱穴を欠く。また、平面的に整然とした長方形をなせず、西桁行方向で2.14m、東桁行方向で2.46mと東桁行方向の方が長くなっている。また、南梁行方向で2.62m、北梁行方向で2.30mを測り、建物の面積は5.55㎡である。南梁行における柱穴間の平均距離は1.31m、西桁行における柱穴間の平均距離は1.07m、東桁行における同距離は1.23mである。

柱穴 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方径16-30cm、検出面からの深さ14-34cmを測る。柱痕はどの柱穴においても検出できなかった。

出土遺物 土師器の甕が出土しているが、小片のため図化できなかった。
 時期 土師器の甕から、奈良時代以降と考えられる。

SB21 (図版83)

検出状況 調査区中央部南側で検出した(第109図)。SD83の東側に位置する。当建物のP2は、P16に切られている。

形状・規模 N5°Eに棟軸方向をとる、梁行1間、桁行1間の掘立柱建物跡である。平面形は歪んでおり、東梁行方向で1.80m、西梁行方向で2.20mと西梁行方向の方が長くなっている。また、北桁行方向は3.46m、南桁行方向は3.32mを測り、建物の面積は6.72㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方径18-35cm、検出面からの深さ13-18cmを測る。どの柱穴においても柱痕は確認できなかった。

第5節 IV区の調査

出土遺物 須恵器と土師器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。須恵器は碗・甕が、土師器は碗・小皿が出土している。土師器の碗は、底部を回転糸切りにより切り離すものである。

時期 11世紀後半～12世紀前半と考えられるP16に切られていること、および出土遺物から判断して、11世紀を中心とした時期と考えられる。

SB23 (図版84)

検出状況 IV区の西側で検出した(第109図)。SH07の東側に位置する。当遺構と明らかに切り合う遺構は認められない。

形状・規模 N40°Wに棟軸方向をとる、梁行1間、桁行2間の側柱建物である。ただし、北隅の柱穴を欠く。南東梁行方向で4.12m、南西桁行方向で5.76mを測り、建物の面積は22.85㎡である。南西桁行方向における柱穴間の平均距離は2.88mである。

柱穴 掘り方の平面形は方形を呈し、一辺32～50cm、柱径15～20cm、検出面からの深さ15～33cmを測る。

出土遺物 土器の小片が出土しているが、図化はおろか、器種・時期の特定もできない。

時期 出土土器から判断することは困難である。掘り方の平面形が方形を呈すること、および棟軸方向等から判断して奈良時代～平安時代と考えられる。

SB24 (図版85)

検出状況 IV区の西側で検出した(第109図)。SH07・SH09と切り合い関係にあり、いずれもSB24が他の遺構を切っている。

形状・規模 N45°Wに棟軸方向をとる、梁行1間、梁行1間からなる建物である。西側梁行方向で4.53m、南側梁行方向で2.86mを測る。桁行方向の平均柱穴間距離は2.75mで、梁行方向の平均柱穴間距離は2.24mである。面積は12.1㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は全て円形からなり、その径は32cm～52cmを測る。深さは20cm～60cmである。掘り方内は灰色系の埴土からなる。各柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は14cm～22cmである。

出土遺物 P1から弥生時代中期の壺底部が、P2から平安時代後期の須恵器碗が、P4から古墳時代から平安時代の土師器が、P5から平安時代の土師器が出土した。

時期 出土土器から判断して、平安時代後半と考えられる。

SB25 (図版85)

検出状況 SB26の南東側に位置する(第109図)。SD83・SD88と切り合い関係にあり、SB25はいずれの遺構も切っている。

形状・規模 N55°Eに棟軸方向をとる、桁行2間、梁行2間からなる建物である。西側梁行方向で2.93m、南側梁行方向で3.87mを測る。桁行方向の平均柱穴間距離は1.43mで、梁行方向の平均柱穴間距離は1.94mである。面積は11.0㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は円形と隅丸方形の両方がある。平面形が円形の方が規模が小さく、そ

の径は10cm～30cmを測る。平面形が隅丸方形の方は規模が大きく一辺43cm～32cmを測る。円形の柱穴は南西側で検出され、隅丸方形の柱穴は北側と東側で検出された。深さは8cm～23cmである。掘り方内は暗灰色系の埋土からなる。柱痕はP1においてのみ確認することができ、その径は12cmである。

出土遺物 平安時代の土師器甕がP5から出土している。

時期 出土土器から判断して、平安時代と考えられる。

SB26 (図版86 写真図版65)

検出状況 SB24の南西側に位置する(第109図)。SH09・SD83・SD87・SD99・SD88などと切り合い関係にあり、いずれの遺構をも切っている。

形状・規模 N45°Wに棟軸方向をとる、桁行4間、梁行2間からなる建物である。西側梁行方向で4.20m、南側梁行方向で8.34mを測る。桁行方向の平均柱穴間距離は2.15mで、梁行方向の平均柱穴間距離は1.99mである。面積は36.0㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は円形がほとんどであるが、隅丸方形もある。円形の柱穴の径は34cm～64cm、隅丸方形の柱穴の一辺は42cm～65cmを測る。深さは8cm～33cmである。掘り方内は暗灰色系の埋土からなる。各柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は8cm～32cmである。

平安時代 いずれの柱穴からも弥生時代前期から中期の土器片が出土している。それ以外には、P2から奈良時代の須恵器坏Bと甕、土師器の甕、P10から奈良～平安時代の須恵器坏片、P11から平安時代後期の須恵器碗などが出土している。

時期 出土遺物から平安時代後期と考えられる。

SB27 (図版87)

検出状況 SB24の南西側、SB28の北西側に位置する(第109図)。SD83・SD87と切り合い関係にあり、SB27はいずれの遺構をも切っている。この他、SB26と平面的に重なり合うが、遺構相互の切り合い関係は不明である。

調査区の南端に位置するため、南側に延びる可能性がある。

形状・規模 N45°Eに棟軸方向をとる、桁行2間、梁行2間からなる建物である。東側梁行方向で2.96m、南側梁行方向で2.20mを測る。桁行方向の平均柱穴間距離は1.48mで、梁行方向の平均柱穴間距離は1.20mである。面積は8.80㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は全て隅丸方形からなり、その規模は1辺36～40cmを測る。個々の柱穴の主軸方向と棟軸方向はほぼ同じである。深さは13～33cmである。掘り方内は暗灰色系の埋土からなる。各柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は14cm～20cmである。

出土遺物 全く出土していない。

時期 柱穴掘り方の平面形から判断して、奈良時代～平安時代を中心とした時期と考えられる。

SB28 (図版87)

検出状況 SB22の西北側に位置する(第109図)。SD99と切り合い関係にあり、SD99を切っている。調査区西南隅で検出されたため全体の規模は不明確である。

形状・規模 N40°Wに棟軸方向をとる。桁行・梁行各1間を検出した。柱穴間距離は北側で1.40m、東側で1.68mである。面積は3.50㎡である。

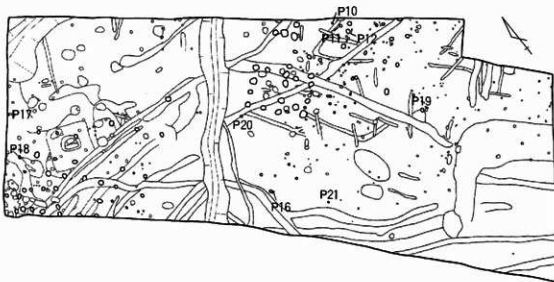
柱穴 掘り方の平面形は全て隅丸方形からなり、その規模は1辺36cm~40cmを測る。個々の柱穴の主軸方向は棟軸方向とほぼ一致する。深さは20cm~23cmである。掘り方内は暗灰色系の埋土からなる。各柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は14cm~16cmである。

出土遺物 539はP2より出土した土師器の甕である。推定口径13.9cmと小型のタイプである。口縁端部は薄くつまみ出すように小さく丸くおさめられている。胴は張らず、残存部分下端より若干下がった位置で、分割整形した丸い底部と胴部を接合していたものであろう。内外面とも磨滅のため調整は不明である。二次焼成を受けており、ススも付着している。

時期 出土した遺物から奈良時代前半と考えられる。

Ⅲ. 柱穴

建物を復元することができなかった柱穴のなかに、比較的良好な状態で遺物が出土しているものが認められる。ここで、これらの柱穴から出土した遺物について報告する。



第110図 IV区第2面 柱穴

P10 (図版80)

出土土器 須恵器の甕が1個体出土している。ただし、口縁部のみしか残存しないため、甕の可能性も否定できない。

時期 器種を皿と判断すると、10世紀~11世紀にかけてと考えられる。

P 1 1 (図版80・89)

出土土器 須恵器・土師器・緑釉の各器種が出土しているが、図化できたのは緑釉のみで、他は小片のため図化できなかった。

緑釉 Ⅲ (551) が出土している。端反り口縁の小片で、2箇所に輪花が認められる。須恵質の胎土である。須恵器は坏Aと坏Bが、土師器は碗と甕が出土している。

時期 緑釉の形態的特徴および須恵器で坏Aと坏Bが出土していることから、10世紀を中心とした時期と考えられる。

P 1 2 (図版80・89 写真図版131)

出土土器 土師器の取手 (556) が出土している。偏平な三角形の粘土板を舌状に折り曲げたもので、三角形の二辺に当たる部分は面取りされている。粗塵～細砂を多量に含む。

時期 奈良時代と考えられる。

P 1 3 (図版80・89 写真図版131)

出土土器 須恵器の甕の口縁部 (557) が出土している。1/4ほどの破片で、推定口径44cmとかなり大型であり、柱穴内に意図的に入れられたものであろう。口縁は大きく外半しながら開き、端部は内側に折り返している。胴部外面は平行タタキ、内面に同心円状の当て具痕を残す。他に、553の須恵器の坏が出土している。

時期 奈良時代と考えられる。

P 1 4 (図版80・89)

出土土器 土師器の甕 (547) が出土している。推定口径25.8cmと大型のタイプで、肩部の角度からみて、長胴甕と考えられる。口縁端部はカットし、端面を二本の凹線状に強くナデている。口縁部内面から胴部内外面に粗いハケメをほどこしている。

時期 奈良時代と考えられる。

P 1 5 (図版80・89)

出土土器 土師器の碗1個体 (552) が出土している。底部はわずかに残存するに過ぎないが、高台の痕跡をとどめる。底部の切り離し方法は観察できない。内外面とも回転体による横ナデ調整により仕上げられている。

時期 552の底部形態から判断して、11世紀後半と考えられる。

P 1 6 (図版80・89 写真図版131)

出土土器 須恵器の控鉢と甕および土師器の鍋が出土しているが、図化できたのは554の控鉢1個体のみである。内面はかなり使用されたようで、磨滅が著しい。底部は回転承切りにより切り離され、ナデ調整により仕上げられている。

時期 鍋が出土していること、および控鉢の形態から判断して、11世紀後半と考えられる。

第5節 IV区の調査

P17 (図版80・89 写真図版182)

- 出土土器 土器と石器が出土している。
- 土器 甕の底部片が2個体分(545・546)出土している。いずれも、胎土中に多量の径2～3mm大の砂粒を含むもので、弥生時代前期の土器と考えられる。
- 石器 磨石(S65)が出土している。底面は平坦で、すわりのよい形の自然石を利用している。石材は細粒花崗岩である。長さ6.65cm、幅6.35cm、厚さ5.5cmと掌に収まる程度の大きさである。重さ319.8g。
- 時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

P18 (図版80・89)

- 出土遺物 須恵器の坏蓋(549)が出土している。
- 549は推定口径15.5cmとやや大型で、天井部は扁平である。つまみは欠損している。
- 時期 出土土器から、奈良時代後半と考えられる。

P19 (図版80・89)

- 出土遺物 須恵器の坏(550)が出土している。
- 550は、推定口径12.75cm、器高2.6cmと浅い。口縁部の外傾度も大きく、時期的に奈良時代でも後半以降に下るものである。
- 時期 出土土器から、奈良時代後半と考えられる。

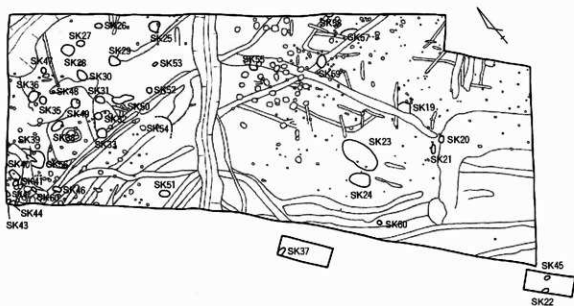
P20 (図版80・89)

- 出土遺物 須恵器の甕の口縁部(548)が出土している。大型の短頸壺ともいうべき直線的に開くタイプで、中程に一条の凹線をめぐらせる。端面は水平にカットしている。砂粒を多量に含む。
- 時期 出土土器から、奈良時代と考えられる。

P21 (図版80・89)

- 出土土器 土師器の甕(555)が出土している。体部外面は叩き整形により仕上げられ、外面全体に煤の付着が認められる。
- 時期 555の甕は古代の甕から中世の鍋への移行期の特徴を示す土器と考えられる。よってこの土器の特徴から、10世紀～11世紀にかけての時期に位置付けたい。

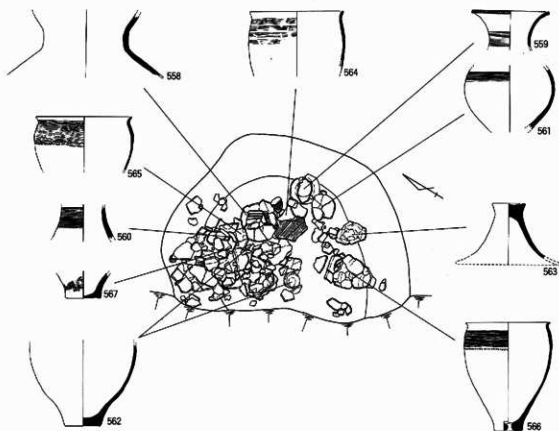
IV. 土 坑



第111図 IV区第2面 土坑

SK19 (図版91~93 写真図版66・131・132)

検出状況 調査区をやや東側に位置し(第111図)、SD96により南側が、SD72により西側がそれぞれ削平されている。また、北側はピットにより切られている。



第112図 SK19土器出土状況

形状・規模 平面形は不整形な楕円形で、長軸方向で1.70m、その直交方向で1.12mを測る。横断面は浅いU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは18cmを測る。長軸はN60°Wを指向する。底部の規模は、長軸方向で1.35m、短軸方向で93cmを測る。

埋没状況 灰色シルト質極細砂と褐灰色シルト質極細砂の2層からなる。両層とも炭が混じっている。

遺物出土状況 全体に土坑の西側で土器が集中して出土しており、上層と下層の間で重なり合って出土している。

同一個体の破片が上下に重なって出土している土器の中には、上側が土器の外面を上にし、下側が土器の外面を下にして出土しており、本来はほぼ完形の状態でも人為的に置かれていたものもある。ただし、図面上で完形に復元できたのは568の1点に過ぎない。

それぞれの個体の隙間には土があまり混入せず、接して出土していることから、時間的に間をおかずに、短期間で土坑内に入れられたものと考えられる。

南隅では、完形に復元できた底部穿孔のある壺(566)と、そのすぐ近くから壺の蓋(563)が出土しており、何らかの関係があるものと考えられる。

出土土器 壺・壺・蓋の各器種が出土している。

壺 完存するものあるいは完形に復元できるものはないが、口縁部(559)・頸部(558・560)・体部(561)・底部(562)がそれぞれ出土している。

口縁部片としては、559の1個体分を図化した。広口壺に分類されるもので、口縁部から頸部にかけて残存する。口縁端部に横方向にヘラ描沈線を施し、これに直交するように刻み目を施している。また頸部には、ヘラ先を櫛状に束ねた帯状沈線が描かれている。18条残存するが、その単位は明確にできない。

頸部片としては558と560の2個体を図化した。その形態から異なるタイプに分類されるものと考えられる。558は、比較的大型の壺で、直立する頸部に対して口縁部が斜上方にのびる。内面の調整は磨滅のため観察できないが、外面はナデ調整により仕上げられている。胎土中に径4mm以下の砂粒を多く含む点は他の同伴土器と同じであるが、赤灰色を呈する点において異なる。560は、広口壺の頸部と考えられる。外面には約1cm間隔でヘラ描沈線が描かれ、この沈線間に5条からなる櫛描直線紋が施文されている。

体部片で図化できたのは561の1個体であるが、広口壺の一部と考えられる。体部中位よりやや上側に、ヘラ先を櫛状にした帯状沈線あるいは櫛描直線紋が12条施されている。内面はナデ調整により仕上げられているが、外面の調整は磨滅のため観察できない。

底部片で図化できたのは、体部中位まで残存する562の1個体である。磨滅のため内外面の調整は観察できない。

壺 底部片を含めて5個体(564-568)を図化した。口縁部はいずれも如意形を呈するものである。

564は、頸部から体部上半にかけて7条からなる櫛描直線紋が4帯施されている。ただし櫛描直線紋そのものは稚拙で、かなり振れが認められる。胎土中には、径4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

565は、頸部から体部上半にかけて、各8条からなるヘラ先を櫛状に束ねた帯状沈線が

4帯認められる。この4帯の直線紋は上側から施文されたようで、下側の直線紋が上側の直線紋の一部に上書するように切り合っている。また、各直線紋は直線的ではなく、かなり振れが認められる。さらに、これら4帯の直線紋の下側には三角刺突紋が認められるが、これも推拙で、その位置は一定していない。他の同伴土器同様、胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

566は、完形に復元できる個体で、底部には径1cmの穿孔が認められる。焼成前に穿孔されたものである。体部上半には、櫛描直線紋が施されているが、残存状況がよくないため、その単位は明確にできない。また、565同様、櫛描直線紋の下側には三角刺突紋が施文されている。他の同伴土器同様、胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

568は当遺跡出土の当該期の寛の中で最も大型の個体で、口径45.8cm、器高63.6cmを測る。底部から口縁部にかけて完形に復元でき、施文・調整も比較的良好に残存する。まず、口縁端部には刻み目が施されている。体部上半から頸部にかけては、ハゲ調整後、ヘラと半截竹管により、直線紋と波状紋が描かれている。直線紋はヘラを3条1単位の櫛状にした帯状沈線で、波状紋は半截竹管によるものである。

蓋 563の1個体である。つまみは指オサエにより整形されているが、他については磨減が著しく、その調整方法は観察できない。径7mm以下の砂粒を多量に含んでいる。

サヌカイト このほか、サヌカイトの薄片4.7gが出土している。

時期 出土土器から弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

SK20

検出状況 調査区南東部、SD61の北隣付近の西層に位置する(第111図)。

形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で88cm、その直交方向で57cmを測る。横断面はU字形で、最深部における検出面からの深さは17cmを測る。長軸はN45°Eを指向する。

埋没状況 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物 器種不明の弥生土器が出土している。

時期 弥生時代は間違いないが、具体的な時期は特定できない。

SK21

検出状況 SK20の西に位置する(第111図)。

形状・規模 平面形は長方形で、長軸方向で1.07m、その短軸方向で43cmを測る。横断面はU字形で、最深部における検出面からの深さは13cmを測る。長軸はN45°Eを指向する。

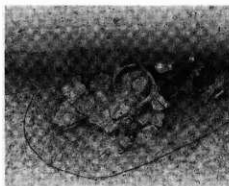
埋没状況 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物 器種不明の弥生土器が出土している。

時期 弥生時代は間違いないが、具体的な時期は特定できない。

SK 2 2 (図版93 写真図版132)

検出状況 当遺構は、確認調査の際に検出したものである(第111図)。結果的に、Ⅲ区とⅣ区の間中部の南西側に設定したトレンチ(No.21)で検出したもので、層位的にも当遺構面に対応することから、当地区の第2面の遺構として報告することにした。



第113図 SK22

形状・規模 一部がトレンチ外までのびるため、全体の形状は明らかにできないが、平面形は楕円形を呈するものと考えられる。主軸方向をほぼ東西方向にとり、その直交方向で35cmを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは25cmである。

出土状況 土器が一括して廃棄された状態で出土している。

出土土器 壺と底部片が出土している。

壺 図化できたのは569・と570の2個体で、いずれも広口壺の口縁部片である。

569は、体部から頸部外面をハケ調整後、体部上半から頸部にかけて、ヘラ先を楕状にした帯状沈線による直線紋と波状紋が描かれている。各施文の単位は異なり、上から12条の直線紋、やや間隔をおいて9条の直線紋、4条の波状紋、5条の直線紋が施されている。胎土中には2~5mmの砂粒が多量に含まれている。

570も、体部から口縁部外面をハケ調整により仕上げた後、4条のヘラ描沈線紋が施されている。上側2条と下側2条の間隔がほぼ同じであることから、半截竹管による施文も考えられる。

底部 571~576の6個体図化した。571~573については壺の底部と、574~576については甕の底部と考えられる。いずれも底部内外面を指オサエにより、体部内外面をナゲ調整により仕上げている。これらのなかで、576は底部のほぼ中央に径1.1cmの穿孔が認められる。焼成前に穿孔されたものである。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期~中期初頭と考えられる。

SK 2 3 (図版94 写真図版132・182)

検出状況 SK24の北側に位置し(第111図)、完存する。柱穴以外の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で4.90m、その直交方向で2.45mを測る。横断面は浅い皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは11cmを測る。長軸はN80°Eを指向する。底部での規模は長軸で4.17m、短軸で1.97mを測る。

埋没状況 灰色極細砂と褐灰色シルト質極細砂の2層からなる。上層の灰色極細砂には土器が多量に含まれていた。

遺物出土状況 上層から遺物が比較的にまとまって出土しており、破片も大きい。特に集中して出土しておらず、全体に散在している。本来、完形のものか土坑内に置かれてあったものかどうかは不明である。また、土器に混ざってやや角の丸まった石が数点出土している。

- 出土土器** 土器と石器が出土している。
- 土器** 壺・甕・鉢の各器種が出土している。
- 壺** 577～579の3個体図化したがい、いずれも底部片である。579は内外面ともナデ調整により仕上げられている。これに対して、577と578は、外面をハケ調整後へツ磨きにより仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられている。
- 甕** 図化できたのは580と581の2個体である。580は、体部上半から口縁部にかけて残存するもので、口縁部はいわゆる逆L字形を呈する。頸部外面には、体部からのハケ調整後、4条のへツ描沈線紋が描かれている。
- 鉢** 図化できたのは582と583の2個体である。582はほぼ完存する。口縁部直下には5条のへツ描沈線紋が描かれている。体部外面下半はハケ調整により、内面はナデ調整により仕上げられている。体部上半は磨滅により調整方法は観察できない。胎上中に4mm以下の砂粒が多量に含まれる。
- 583についても、底部が脚形態をなすことから鉢と判断した。1417(図版188)と同タイプの鉢と考えられる。
- 石器** S66は石皿である。欠損のため元の形は不明であるが、平面形は隅丸方形に近い。片側の薄い扁平な自然石を利用したものであろう。石材は流紋岩質多結晶溶結凝灰岩である。現存の長さ10.2cm、幅10.6cm、厚さ3.7cm、重さ517.2g。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期末と考えられる。

SK24

- 検出状況** 調査区の東側で、SK23の南側に位置する(第111図)。完存する。他の遺構との切り合いは認められない。
- 形状・規模** 平面形は隅丸長方形で、長軸方向で2.48m、その直交方向で1.50mを測る。横断面は浅い皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは17cmを測る。長軸はN32°Eを指向する。底部での規模は長軸方向で2.10m、短軸方向で1.32mを測る。
- 埋没状況** 灰褐色極細砂1層からなる。土器は含まれていない。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** SK23と埋土の特徴が類似することから、SK23とほぼ同じ時期と考えられる。

SK25

- 検出状況** 調査区北部、SD95の北に位置し(第111図)、柱穴に切られている。
- 形状・規模** 平面形は隅丸方形で、長軸方向で1.10m、短軸方向で1.13mを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは22cmを測る。長軸はほぼ南北方向を指向する。
- 埋没状況** 黄灰褐色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物** 土器と石器が出土している。
- 土器** 弥生土器と考えられる小片が出土しているが、図化はもちろんのこと器種の特定も困難である。
- 石器** サヌカイトの剝片(0.9g)が出土している。

第5節 IV区の調査

時期 出土土器からの時期の特定は困難であるが、埋土の特徴から弥生時代と判断される。

SK26

検出状況 IV区北隅付近、SD98の南に位置する（第111図）。

形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で80cm、短軸方向で65cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは14cmを測る。長軸はほぼ南北方向を指向する。

埋没状況 黄灰褐色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物 全く出土していない。

時期 埋土の特徴から判断して、弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。

SK27（写真図版66）

検出状況 IV区北隅付近、SK26の西に位置する（第111図）。

形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で92cm、短軸方向で75cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは12cmを測る。長軸はN45°Eを指向する。

埋没状況 黄灰褐色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物 弥生土器とサヌカイト片が出土している。

土器 壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

壺 体部片と底部片が出土している。

甕 口縁部片と底部片が出土している。口縁部片は如意形を呈する。

サヌカイト 剥片0.6gが出土している。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期末と考えられる。

SK28（図版95 写真図版67・133・182）

検出状況 IV区北隅付近、SK27の西に位置する（第111図）。

形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で1.54m、短軸方向で1.22mを測る。横断面は浅い皿形をなし、最深部における検出面からの深さは12cmを測る。長軸はN45°Eを指向する。

埋没状況 黄灰褐色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物 土器と石器が出土している。

土器 壺・甕・鉢の各器種が出土している。

壺 直口壺（584）と体部片（585）・底部片（586）が出土している。

584はほぼ完存するもので、比較的小型の壺である。外面は体部から口縁部にかけてハケ調整により仕上げられているが、内面は磨滅により観察できない。胎土中に5mm以下の砂粒を多量に含む。

585は、体部中位の小片であるが、ヘラ描沈線紋が描かれている。上側は3条の直線紋が、中位は2条の波状紋、下側は5条の直線紋が施されている。

586は、底部を指オサエ、体部下半内外面はハケ調整により仕上げられている。

甕 4個体（587～590）図化できたが、いずれも如意形口縁に分類されるものである。

587・588・590は、口縁部を横ナデ調整、体部内外面をナデ調整により仕上げられてい

る。

一方589は、頸部下に7条のヘラ描沈線紋が施されている。口縁部および体部の調整方法は他の壺と同じである。

- 石器** 叩き石 (S 67) が出土している。平面形は長楕円形で、一方の面は平坦でもう一方の面はふくらみを持ち、断面を円化すると丸みを帯びた低い三角形になる。長さ11.55cm、幅5.1cm、厚さ1.7cm、重さ151.20g。石材は流紋岩質弱溶結凝灰岩である。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期末と考えられる。

SK 29

- 検出状況** IV区北隅付近、SD95の西に接している (第111図)。
- 形状・規模** 平面形は楕円形で、長軸方向で1.24m、短軸方向で1.10mを測る。横断面は浅い皿形をなし、最深部における検出面からの深さは5cmを測る。長軸はN34°Eを指向する。
- 埋没状況** 埋土は炭を多く含む。
- 出土遺物** 器種不明の弥生土器が出土している。
- 時期** 土器片の胎土の特徴から、中期後半以降と考えられる。

SK 30 (写真図版66)

- 検出状況** 調査区北隅付近、SD96の北に接している (第111図)。
- 形状・規模** 平面形は楕円形で、長軸方向で1.37m、短軸方向で1.10mを測る。横断面は浅い皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは6cmを測る。長軸はほぼ北を指向する。
- 埋没状況** 黄灰褐色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物** 弥生時代の壺・奈良時代の坏・平安時代の椀が出土している。
- 時期** 複数の時代の遺物が出土しているが、最も新しい時期の土器から判断して平安時代と考えられる。

SK 31 (図版96 写真図版67・183)

- 検出状況** SK32の北側に位置する (第111図)。ほぼ完全に検出された。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。
- 形状・規模** 平面形は楕円形を呈し、長軸方向で1.15m、その直交方向で80cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは19cmを測る。長軸はN80°Eを指向する。底部での規模は長軸方向で85cm、短軸方向で46cmを測る。
- 埋没状況** 褐灰色シルト質極細砂と灰色シルト質極細砂の2層からなる。埋土はレンズ状に堆積しており、徐々に埋没していったものと考えられる。
- 遺物出土状況** 土坑北側の長軸方向の端で、壺の下半部が1個体分だけまともに出土している。
- 出土遺物** 土器と石器が出土している。
- 土器** 壺の底部と体部片が出土しているが、円化できたのは591の底部片に限られる。591は、外面をヘラ磨き、内面を板ナヅ調整により仕上げられている。なお、体部片にはヘラ描沈線紋が描かれている。

第5節 IV区の調査

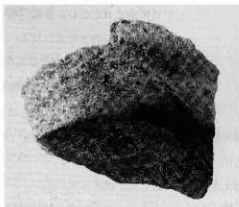
- 石器** S68は大型の磨製石包丁の素材と考えられる。石材は凝灰質細粒砂岩で泥岩を挟んでおり、偏平に剝離しやすい素材である。SD48出土のS60と非常に類似している。現存長12.45cm、幅8.75cm、厚さ1.2cm。重さ204.5g。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期新段階と考えられる。
- S K 3 2 (図版96 写真図版183)
- 検出状況** SK31とSK33の中間に位置する(第111図)。ほぼ完全に検出された。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。
- 形状・規模** 平面形は楕円形で、長軸方向で1.03m、その直交方向で80cmを測る。横断面は浅い皿形をなし、最深部における検出面からの深さは26cmを測る。長軸は真北を指向する。底部での規模は長軸方向で62cm、短軸方向で38cmを測る。
- 埋没状況** 炭・土器を含んだ暗灰色シルト質極細砂1層からなる。
- 遺物出土状況** 全体に散在して出土しており、特に集中しては出土していない。破片の大きさも小さい。また、完形の大型打製石包丁が土坑の壁の傾斜した部分から出土している。
- 出土土器** 土器と石器が出土している。
- 土器** 壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。
- 壺** 広口壺の口縁部片と体部片が出土している。体部片には、多条沈線が描かれたものと多条の突帯が貼り付けられたものが認められる。
- 甕** 如意形の口縁部片が出土している。体部にはへら描沈線紋が描かれている。
- 石器** S69はサヌカイト製の大型の打製石包丁である。平面形は斜辺の長さが異なる台形に近い形で、背部はやや丸みをもって仕上げられている。長さ13.2cm、幅9.8cm、厚さ1.15cm。重さ181.6g。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期新段階と考えられる。

S K 3 3 (図版97・98 巻首図版7 写真図版68・133)

- 検出状況** SK32の南側に位置する(第111図)。SD87によって南半分が削平されているが、土坑の下半では削平を免れ完存している。
- 形状・規模** 平面形は円形で、長軸方向で1.28m、その直交方向で1.25mを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは43cmを測る。
- 埋没状況** 下層から順に暗灰色シルト質極細砂、黒灰色シルト質極細砂(黄白色粒混ざる)、黄灰褐色極細砂混じりシルト、暗灰色シルト質極細砂の計4層からなる。いずれの層にも炭が混在していた。この内、この土坑が機能していたところに存在したと考えられるのは下から2層のみで、それより上層については中央に掘えられた完形の大型壺がつぶれた後に堆積したものであると思われる。また、下から2層目は、土器を据えるにあたっての裏込めとして人為的に置かれた土である可能性が高い。
- 遺物出土状況** ほぼ完形の大型壺592が土坑底に押し潰された状態で出土している。土器の上半部については押しつぶされた状態で崩れて出土したが、下半部については土器の原形を留めており、本来は完形の土器が口縁部を上にして据えられていたものと考えられる。

土器の下からは2箇所で焼土塊が出土しており、他の2箇所からもその痕跡(図版98の網目部分)が認められることから、本来はこの4箇所の焼土塊により土器が支えられていたものと考えられる。

また、埋土には炭が混ざっていたが、特に土坑の底付近に多く認められ、土器の底部には炭の付着が確認できた(第114図)。



第114図 壺の底部

出土土器 592の壺1個体である。ほぼ完存する、器高44.4cm、体部最大径47.0cmとかなり大型の土器である。ただし、口径は11.9cmと体部の大きさから比べるとかなり小さい。口縁端部には刻み目が施されている。体部から口縁部にかけての外側および口縁部内面はハケ調整により、体部内面はナデ調整により仕上げられている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

時期 出土土器から判断して弥生時代前期新段階と考えられる。

SK35

検出状況 調査区北隅付近、SD96の西側に位置している(第111図)。
形状・規模 平面形は隅丸方形で、長軸方向で1.00m、短軸方向で80cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは12cmを測る。長軸はN45°Eを指向する。
埋没状況 黒褐色砂混じりシルト1層からなる。
出土土器 壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため固化できなかった。壺では広口壺の体部片が出土しており、櫛指直線紋と櫛指波状紋が施文されている。甕では、如意形を呈する口縁部片が出土している。
時期 出土土器から判断して、弥生時代中期初頭と考えられる。

SK36

検出状況 調査区北隅付近、SK35の西に位置している(第111図)。
形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で1.43m、短軸方向で1.08mを測る。横断面は皿形で、最深部における検出面からの深さは13cmを測る。長軸はほぼ南北方向を指向する。
埋没状況 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。
出土遺物 器種不明の弥生土器が出土している。
時期 弥生時代に位置付けられるが、より細かな時期は特定できない。

SK37 (図版99 写真図版133・134)

検出状況 当遺構は確認調査で検出した遺構である。当調査区中央部南西側のトレンチ(No.25)の南西隅で検出されている。
形状・規模 トレンチの南西隅で検出されたため、当遺構はトレンチ外までのびており、全体の平面

形は明確にできない。長楕円形もしくは溝状を呈するものと考えられる。主軸を東西方向にとり、主軸方向で1.4m、その直交方向で70cmを検出している。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは30cmを測る。

埋没状況 黒灰色シルト混じり極細砂1層が堆積していた。

出土土器 壺と甕が出土している。

壺

広口壺の体部中位から口縁部にかけて復元できるもの(593)、体部中位の小片

(594)、口縁部と底部を欠く体部片(595)、底部片(598・599)が出土している。

593は、内外面とも磨滅している。体部中位に5条のヘラ描沈線が描かれている。

594は小片であるが、ヘラ描による直線紋と波状紋が描かれている。上側から波状紋、直線紋、波状紋、直線紋、波状紋の順に施文されており、それぞれ3条が1単位となり、最も上側の波状紋を除いては2単位ずつ施されている。直線紋については、ヘラ先による帯状で各3条の沈線がほぼ平行している。波状紋についても、基本的にはヘラ先を束ねて施文したようである。ただし、最も下側の波状紋帯の上側の波状紋については、3本の沈線のうち1本が他と間隔があいており、1本1本施文したようにも観察できる。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

595は体部上半に、上側から波状紋と直線紋が交互に施されている。波状紋については、残存状況がよくないため詳しくは観察できないが、各2単位ずつ施文されている。各単位の規模は明確にできないが、多いもので4条確認できる。直線紋については、下側2帯は2条のヘラ描沈線を描いているのみである。これに対して上側の2帯は、2条のヘラ描沈線で割り付けたなかに櫛描直線紋を描いている。体部内面は板ナデ調整により仕上げられ、体部外面下半にはヘラ磨きの痕跡がわずかに観察できる。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

甕

口縁部を2個体分(596・597)図化した。596には19条からなる、597には42条からなる櫛描直線紋がそれぞれ描かれているが、その単位は明確にできない。両個体とも、胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

時期 出土土器から判断して弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

SK38 (図版100 写真図版69)

検出状況 SH07の内部に位置する(第111図)。SH07の柱穴に切られている。

形状・規模 平面形は不整形の隅丸方形で、長軸方向で1.58m、その直交方向で77cmを測る。横断面は幅の広いU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは49cmを測る。底部での規模は90cm×44cmを測る。

埋没状況 土坑の西側底には白色の粘土が認められ、人為的に敷かれたものと考えられる。厚さは最大で約3cmを測る。その直上には黒灰色のシルトが堆積し、それより上層は灰色系のシ



第115図 SK37

	ルト質極細砂が堆積していた。
出土遺物	土器と石器が出土している。
土器	壺と甕が出土しているが、図化できたのは甕1個体分(602)のみである。
壺	体部片と底部片が出土している。体部片には多条のヘラ描沈線紋が認められる。
甕	口縁部片と底部片が出土している。口縁部片には、図化した如意形を呈するもの(602)と、逆L字形をなすものが認められる。602は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。
石器	サヌカイトの剣片(1.6g)が出土している。
時期	出土土器から判断して弥生時代前期新段階と考えられる。

SK39

検出状況	調査区の西隅に位置し(第111図)、SD99を切っている。
形状・規模	平面形は不整形で、長軸方向で1.40m、その直交方向で45cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは4cmを測る。長軸はN65°Eを指向する。
埋没状況	すべて炭からなる。
出土遺物	器種不明の弥生土器片が出土している。
時期	弥生時代に位置付けられることは間違いないが、具体的な時期の特定は困難である。ただし、胎土の特徴から中期後半以降と考えられる。

SK40 (図版99)

検出状況	調査区西隅付近、SD99の西側に位置している(第111図)。
形状・規模	平面形は長方形で、長軸方向で1.43m、短軸方向で82cmを測る。横断面はV字形をなし、最深部における検出面からの深さは38cmを測る。長軸はほぼ南北方向を指向する。
埋没状況	2層からなり、上層は灰褐色シルト質極細砂、下層は黒褐色シルトで炭を含んでいる。
出土遺物	底部片がわずかに1点(601)出土している。甕の底部と考えられる。内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。
時期	出土土器から判断して、弥生時代前期新段階と考えられる。

SK41

検出状況	調査区西隅付近、SK40の南西に位置している(第111図)。
形状・規模	平面形は楕円形で、長軸方向で72cm、短軸方向で55cmを測る。横断面は楕円形を呈し、最深部における検出面からの深さは4cmを測る。長軸はN30°Eを指向する。
出土遺物	全く出土していない。
時期	遺物が全く出土していないことから、時期の特定は困難である。

SK42

- 検出状況** 調査区西隅付近にあり(第111図)、側溝に切られている。
- 形状・規模** 平面形はおそらく楕円形で、長軸方向で78cm残存し、短軸方向で68cmを測る。横断面は逆台形で、最深部における検出面からの深さは26cmを測る。長軸はN25°Wを指向する。
- 埋没状況** 黒褐色シルト質極細砂1層からなり、炭を含む。
- 出土遺物** わずかに壺の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。多条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期新段階と考えられる。

SK43

- 検出状況** SK42の西、調査区西隅にあり(第111図)、側溝に切られている。
- 形状・規模** 平面形はおそらく楕円形と考えられ、残存している部分は長軸方向で65cm、短軸方向で53cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは24cmを測る。長軸はほぼ東西方向を指向するものと思われる。
- 埋没状況** 黒褐色シルト質極細砂1層からなり、炭を含む。
- 出土遺物** 器種不明の弥生土器が出土している。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代中期後半以降と考えられる。

SK44

- 検出状況** 調査区西隅付近、SK43の南にあり(第111図)、側溝に切られている。
- 形状・規模** 平面形はおそらく楕円形と考えられ、残存している部分は長軸方向で62cm残存し、短軸方向で57cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは20cmを測る。長軸はN65°Eを指向する。
- 埋没状況** 黒褐色シルト質極細砂1層からなり、炭を含む。
- 出土遺物** 壺の口縁部片と体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。口縁部片は逆L字形をなすものである。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期新段階と考えられる。

SK45 (図版99)

- 検出状況** 確認調査で明らかとなった遺構である。SK22同様、当調査区の南隅に位置する(第111図)トレンチ(No.21)で検出されている。
- 形状・規模** 平面形は楕円形を呈する。主軸方向をほぼ東西方向にとり、主軸方向で52cm、その直交方向で32cmを測る。横断面は逆台形をなす。
- 出土遺物** 壺(600)が出土している。体部はやや長細い球形をなし、口縁部は厚く、「く」字状に外反する。端部はナデ調整による窪みを有し、面を上方からやや外側に向ける。調整は体部外面が縦方向のハケ目、内面が頸部との境で横方向のハケ目が認められる。他の部分については磨滅のため観察できなかった。
- 時期** 出土土器から判断して、奈良時代と考えられる。

SK47 (図版101)

- 検出状況** 当調査区の北側に位置する(第111図)。SH08中央土坑の北東、SK36の東側、SK28の西側、SD98の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は隅丸方形を呈し、長軸方向で61cm、その直交方向で58cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは6cmである。
- 埋没状況** 黒褐色シルト質極細砂1層が堆積していた。
- 遺物出土状況** 壺の口縁部片と高坏の脚部片が土坑底に近いレベルで、比較的近い位置で出土している(図版101)。
- 出土遺物** 壺(606)と高坏(607)が出土している。
- 壺** 広口壺の口縁部片が出土している。内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 高坏** 脚部片が出土している。脚部は横ナデ調整により仕上げられ、脚外面にはヘラ磨きの痕跡が認められる。
- 時期** 出土土器から判断すべきであるが、壺は弥生時代前期、高坏は弥生時代中期の特徴を有するものである。両者が伴出したことは明白である(図版101)ことから、弥生時代中期に埋没したものと考えたい。

SK48 (図版101 写真図版69)

- 検出状況** SD96の西端に位置する(第111図)。
- 形状・規模** 平面形は楕円形で、長軸方向で32cm、その直交方向で27cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは6cmを測る。長軸はN55°Wを指向する。
- 埋没状況** 暗灰色シルト質極細砂1層からなる。
- 遺物出土状況** 1個体の壺の破片が、土坑の床面にほぼ接して出土した。土坑の上半部は削平されている可能性があるため、詳細は不明であるが、本来は完形で置かれていた可能性がある。残された破片の遺存状況は比較的よい。口縁部は西側を向いている。
- 出土遺物** 608の壺1個体が出土している。口縁部内外面および体部内面は指オサエおよびナデ調整により仕上げられている。体部外面はハケ調整により仕上げられている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期-中期初頭と考えられる。

SK49 (図版102 写真図版69・134)

- 検出状況** 調査区の北西、SH07の北にあり(第111図)、北側約1/3は上層の溝SD17により削平されている。
- 形状・規模** 平面形はおそらく楕円形と考えられ、長軸方向で2.56m残存し、短軸方向で1.74mを測る。横断面は浅い皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは17cmを測る。長軸はN81°Wを指向する。
- 埋没状況** 黒褐色砂質シルト1層からなる。
- 出土遺物** 高坏1個体分(609)が出土している。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げら

第5節 IV区の調査

れている。体部内面についてもヘラ磨きの痕跡がわずかに認められる。

時期 出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

SK50 (図版100 写真図版69・134)

検出状況 SK24の東側に位置する(第111図)。西側の一部が削平されており、全体の形状は不明である。

形状・規模 平面形は不整形で、長軸方向は現存で1.60m、その直交方向で74cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは12cmを測る。長軸はN25°Eを指向する。

埋没状況 暗褐色極細砂1層からなる。

出土遺物 土器と石器が出土している。

土器 壺と甕が出土しているが、同化できたのは甕(603-605)に限られる。

壺 広口壺の口縁部片と底部が出土している。

甕 口縁部から体部にかけて残存するもの(603)と底部片(604・605)が出土している。

603は、口縁部が如意形を呈し、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。体部は内外面ともハケ調整により仕上げられている。そして、ハケ調整後、体部上半～頸部にかけてヘラと櫛による直線紋が認められる。まず、4条のヘラ描沈線により割り付けられた後、ヘラ描沈線に挟まれた3箇所(5)に5条を単位とする櫛描直線紋が施文されている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

604・605の底部は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

石器 サマカイトの剝片(0.6g)が出土している。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。

SK51

検出状況 調査区中央部西寄り、SD90の北にある(第111図)。

形状・規模 平面形は隅丸方形で、長軸方向で1.20m、短軸方向で70cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは10cmを測る。長軸はN45°Wを指向する。

埋没状況 暗灰色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物 須恵器の壺の口縁部、古墳時代の土師器の高坏、弥生中期の高坏などが出土している。

時期 出土土器のなかで最も新しい時期を示す須恵器から、奈良時代に位置付けたい。

SK52

検出状況 調査区の中央部北西寄り、SD90の北にあり(第111図)、上層の溝SD17の削平を受けている。

形状・規模 平面形はおそらく楕円形で、長軸方向で55cm残存し、短軸方向で25cmを測る。横断面はおそらく逆台皿形を呈すものと考えられ、最深部における検出面からの深さは26cmを測る。長軸はほぼ東西方向を指向する。

埋没状況 埋土は2層に分層でき、上層は黒褐色シルト質極細砂、下層は黒褐色シルトである。

- 出土遺物** 弥生時代前期～後期の土器が混在して出土している。前期の土器としてはヘラ描沈線を有する壺の体部片が、中期の土器としては甕の体部片が、後期の土器としては甕の口縁部片が出土している。いずれの土器も小片のため、図化できなかった。
- 時期** 弥生時代の各時期の土器が混在しているため、時期の特定は困難であるが、最も新しい土器（後期）を考慮に入れて、弥生時代後期以降に埋没したものと考えたい。

SK 5 3

- 検出状況** 調査区の中央部北西寄り、SD90とSD95の間に位置する（第111図）。
- 形状・規模** 平面形は楕円形で、長軸方向で82cm、短軸方向で30cm残存する。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは7cmを測る。長軸はほぼ南北方向を指向する。
- 埋没状況** 黄灰色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物** 器種不明の弥生土器が出土している。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代中期後半以降と考えられる。

SK 5 4

- 検出状況** 調査区の中央部北西寄りに位置し（第111図）、SD88を切っている。なお、上層の溝SD17の削平を受けている。
- 形状・規模** 平面形は楕円形と考えられ、長軸方向で2.20m残存し、短軸方向で70cmを測る。横断面は皿形を呈し最深部における検出面からの深さは8cmを測る。主軸はほぼ南北を指向する。
- 埋没状況** 黒褐色シルト質極細砂1層からなり、炭を含む。
- 出土遺物** 壺の体部片と底部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。これらの胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- この他、サヌカイトの剥片が0.07g出土している。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期新段階と考えられる。

SK 5 5（図版104 写真図版70）

- 検出状況** 当調査区中央部やや北東側に位置する（第111図）。SD71と切り合い関係にあり、切られている。またSB18と平面的に重複するが、当遺構の方が明らかに古い。
- 形状・規模** SD71に切られているため全体の形状は明確にできないが、楕円形を呈するものと考えられる。南東～北西方向に主軸方向をとり、この方向で90cmを測る。この直交方向については65cm残存する。横断面は深い皿形を呈するものと考えられ、最深部における検出面からの深さは22cmを測る。
- 埋没状況** 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。
- 遺物出土状況** 数個体の土器が、上坑底に一括で廃棄された状態で出土している。
- 出土遺物** 壺と甕が出土している。
- 壺** 口縁部（627～629）と、体部から底部にかけて残存するもの（630）が出土している。627は、頸部に3条のヘラ描沈線紋が描かれている。内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

628は、口縁部内外面を横ナデ調整、頸部一部にかけての外側面はハケ調整により仕上げられている。そして、頸部以下にヘラ先を帯状に束ねて施文した1単位4条の直線紋が3帯認められる。体部の2帯はそれぞれ1単位からなるが、頸部には2単位施文されている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

629は頸部に横描直線紋が1単位施されている。12条からなる。口内内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

630も体部中位に横描直線紋が4帯施されている。1単位5条からなる。体部内面はナデ調整より仕上げられている。この土器についても、胎土中に4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

壺 口縁部から体部上半まで残存するもの(632)と底部のみ残存するもの(631)が出土している。

631は、底部中央に焼成後に径1cmの穿孔が施されている。内面はナデ調整により仕上げられている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

632は比較的大型の壺である。口縁部内外面と体部内面は指オサエとナデ調整により仕上げられている。体部外面にはわずかにハケ調整の痕跡が認められる。頸部と体部上半部にはそれぞれ4条からなる帯状沈線が描かれている。この土器についても胎土中に5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

SK56 (図版102・103 写真図版134・135)

検出状況 調査区の中央部北西寄りに位置し(第111図)、SD99を切っている。なお、上層の溝SD17の削平を受けている。

形状・規模 平面形はおそらく楕円形で、残存している部分は長軸方向で2.20m、短軸方向で70cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは8cmを測る。長軸はN55°Eを指向する。

埋没状況 埋土は4層ないし6層に分層でき、上層は黄灰色系統のシルトないしシルト質極細砂、下層は黒褐色系統のシルトないしシルト質極細砂で、滞水した淀みが洪水砂で埋没した状況が想定される。

出土遺物 壺・甕・蓋の各器種が出土しているが、蓋については小片のため図化できなかった。

壺 広口壺の口縁部から肩部にかけて残存する個体を3点(610～612)図化している。

610は内外面ともナデ調整により仕上げられている。611も内外面ともナデ調整により仕上げられた後、頸部に7条のヘラ描沈線が描かれている。612は内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。いずれも胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

壺 口縁部形態および法量においてかなりのバリエーションをもって出土している。口縁部は、如意形をなすものと逆L字形をなすものとが認められ、法量的には大型・中型・小型のものが認められる。

613は大型の甕で、口縁部は逆L字形をなす。頸部直下には4条のヘラ描沈線紋が描か

れている。体部内面はナデ調整、外面はハケ調整により仕上げられている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

615は完形に近い土器である。口縁部は如意形をなし、底部には径1.8cmの穿孔が認められる。口縁部は横ナデ調整、体部内面はナデ調整、体部外面はハケ調整によりそれぞれ仕上げられている。ハケ調整後、頸部直下には6条のヘラ描沈線紋が描かれている。この土器にも5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

616は底部のみであるが、中央に径2cmの穴が穿孔されている。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

617は中型の甕で、口縁部は逆L字形をなす。口縁部は指オサエにより、体部内外面はナデ調整により仕上げられている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

618は小型の甕で、口縁部は如意形をなす。614とは対比的に、口縁部は大きく外反する。体部内面は板ナデ調整、外面はハケ調整により仕上げられている。頸部直下には7条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

619も小型の甕である。618同様、頸部直下に7条のヘラ描沈線紋が描かれている。体部外面にはハケ調整の痕跡がわずかに認められる。

620は逆L字形をなす口縁部の小片である。頸部直下に7条のヘラ描沈線紋が描かれ、その下側には2条のヘラ描沈線により山形紋が描かれ、さらにその下側には3条のヘラ描沈線紋が描かれている。内面は指オサエにより仕上げられている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

621は、他の共存する甕と比べ体部が直立傾向にある。頸部直下には7条のヘラ描沈線紋が描かれている。また口縁端部には刻み目が施されている。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内面は指オサエ・指ナデ調整により仕上げられている。体部外面はナデ調整により仕上げられているが、部分的にヘラ磨きが施されている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

鉢 614は中型の鉢で、口縁部は如意形をなすが、強い指オサエを施した程度で口縁部の外反はわずかである。内外面ともナデ調整により仕上げられ、ヘラ描沈線等の施文は認められない。この土器にも5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

底部 622・623とも壺の底部と考えられる。内面はいずれもナデ調整により仕上げられている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期新段階と考えられる。

SK57

検出状況 調査区の中央部南東寄りに位置し(第111図)、SD68・SD65に切られている。平面形は不整形で、残存する部分は長軸方向で2.0m、短軸方向で1.10mを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは3cmを測る。

埋没状況 灰褐色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物 壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

壺 広口壺の体部片が出土している。櫛描直線紋と櫛描波状紋が施されている。

第5節 IV区の調査

壺	体部片が出土しており、半截竹管による直線紋と波状紋が施されている。
他	この他、サヌカイトの剥片0.07gが出土している。
時期	出土土器から判断して、弥生時代前期新段階～中期初頭と考えられる。

SK58

検出状況	調査区の中央付近、北東の側溝際に位置している(第111図)。SD66を切っている。
形状・規模	平面形はおそらく円形で、残存している部分は長軸方向で1.07m、短軸方向で40cmを測る。横断面は箱形を呈し、最深部における検出面からの深さは29cmを測る。長軸はN75°Wを指向する。
埋没状況	黒褐色シルト質極細砂1層からなり、炭を含む。
出土遺物	器種不明の弥生土器が出土している。
時期	出土土器から判断して、中期後半以降と考えられる。

SK59 (図版105・106 写真図版70・136・184)

検出状況	調査区の中央付近に位置している(第111図)。SD65を切っている。
形状・規模	平面形は楕円形で、長軸方向で1.65m残存し、短軸方向で1.13mを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは32cmを測る。長軸はN59°Eを指向する。
埋没状況	黒褐色シルト質極細砂1層からなる。
遺物出土状況	壺や甕の大きな破片が底一面を覆うように分布していた。ただし、完形に近い土器がそのまま潰れているという状況ではなかった。また、打製石包丁も土器に混じて出土している。
出土遺物	土器と石器が出土している。
土器	壺と甕が出土している。
壺	大型の広口壺(633)と小型の広口壺(635)が出土している。 633は口頸部内外面をナデ調整により仕上げ、頸部に5条のヘラ描沈線紋が描かれている。635についても、口頸部内外面をナデ調整により仕上げ、頸部から肩部にかけてに5条のヘラ描沈線紋が描かれている。また、口縁端部には指頭圧痕紋が施されている。いずれも胎土中に5mm以下の砂粒が多量に含まれている。
壺	口縁部から体部まで残存する大型壺(634・641)と底部(636～640)が出土している。 634は口縁部内外面を横ナデ調整、体部内面をナデ調整、体部外面をナデ調整により仕上げられている。頸部から体部上半にかけては、ハケ調整後上から櫛描直線紋・櫛描波状紋・櫛描直線紋・櫛描波状紋・櫛描波状紋の順に描かれている。櫛描直線紋は12条、櫛描波状紋は5条を単位としている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。 641は口縁部内外面を横ナデ調整、体部内面をハケ調整、体部外面をナデ調整によりそれぞれ仕上げられている。頸部直下にはヘラ先を櫛状に束ねた4条1単位の帯状沈線が3単位施文されている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。 底部片はいずれも内外面ともナデ調整により仕上げられている。
石器	S70はサヌカイト製の打製石包丁である。横長剥片を素材とし、背部はステップ状の二

次加工と部分的な研磨を行っている。刃部は比較的ていねいな平坦剥離により直線的に作られている。また、全体の形状は角張っており、刃部以外も直線的に加工されている。刃部による使用による磨耗がみとめられる。長さ11.2cm、幅5.05cm、厚さ0.9cm、重さ67g。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。

SK60 (図版103 写真図版135)

検出状況 調査区の西隅付近に位置している (第110図)。SD101を切っている。

形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で71cm、短軸方向で40cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは51cmと面積に比して深い。長軸はN15°Wを指向する。

埋没状況 埋土は2層に分層でき、上層は暗灰色シルト質極細砂、下層は黒灰色シルト質極細砂からなる。

出土遺物 壺と甕が出土している。

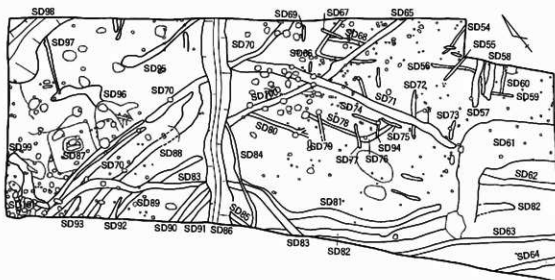
壺 広口壺が2個体分 (624・625) が出土している。

624は頸部に断面三角形をなす突帯が2条貼り付けられている。また625の頸部には6条のヘラ描沈線紋が描かれている。

甕 同化できたのは626の1個体である。頸部に6条のヘラ描直線紋が描かれている。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期新段階と考えられる。

V. 溝



第116図 IV区第2面 溝

SD54

検出状況 IV区東隅付近で検出された (第116図)。東端は調査区外へ伸びている。

形状・規模 溝の方向は東西方向である。長さは4.04m検出した。幅は検出面で24～28cm、溝底で14～16cmを測る。断面は浅い皿形を呈し、検出面からの深さは4cmである。溝底の標高は西端で6.81m、東端で6.78mを測り、西方向から東方向へ流れていたものと思われる。

第5節 IV区の調査

埋没状況 埋土は黒褐色シルト質極細砂である。
出土遺物 全く出土していない。
時期 埋土の特徴から、弥生時代と考えられる。

SD55 (図版108)

検出状況 IV区東隅付近で、SD54の南側をほぼ平行に流れている(第116図)。SD56を切っている。
形状・規模 溝の方向は東西方向である。長さは3.50m検出された。幅は検出面で20-38cm、溝底で12-22cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは5cmである。溝底の標高は西端で6.81m、東端で6.78mを測り、西方向から東方向へ流れていたものと思われる。
埋没状況 黒褐色シルト1層からなる。
出土遺物 壺のみが出土している。
壺 図化できたのは644の1点のみである。口縁部を横ナデ調整により、頸部内面をナデ調整により仕上げられている。頸部外面には4条からなる構描直線紋が2帯描かれている。各々の沈線の詳細に観察すると、ほぼ平行する4条のなかで1条と他の3条との間には段差が認められる。よって、3条の帯状沈線と1条のヘラ描沈線がセットになっている可能性も考えられる。ただし、残存状況がよくないため、明確にすることは困難である。
時期 出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

SD56

検出状況 IV区東隅付近で検出された(第116図)。SD55・SD57に切られている。
形状・規模 溝の方向は北西から南東である。長さは5.16mが検出された。幅は検出面で30-35cm、溝底で20-24cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは4cmである。溝底の標高は南東端で6.84m、北西端で6.78mを測り、その方向へ流れていたものと思われる。
埋没状況 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。
出土遺物 全く出土していない。
時期 SD55との切り合い関係から弥生時代前期末以前と考えられる。

SD57

検出状況 IV区東隅付近で検出された(第116図)。SD56を切っている。
形状・規模 溝の方向は北東から南西である。長さは5.35mが検出された。幅は検出面で68-85cm、溝底で48-75cmを測る。断面は平底を呈し、検出面からの深さは12cmである。溝底の標高は南西端で6.68m、北東端で6.63mを測り、その方向へ流れていたものと思われる。
埋没状況 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。
出土遺物 土器は須恵器の壺・甕、土師器の坏や甕の破片が出土している。
時期 出土遺物から、奈良時代と考えられる。

SD58

- 検出状況 IV区東隅付近(第116図)、SD57の南東をほぼ平行に流れている。
- 形状・規模 溝の方向は南西から北東である。長さは4.24m検出された。幅は検出面で75cm、溝底で62~72cmを測る。断面は平底で、検出面からの深さは10cmである。溝底の標高は南西端で6.77m、北東端で6.68mで、南西から北東方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況 黒褐色極細砂1層からなる。
- 出土遺物 器種不明の弥生土器が出土している。
- 時期 弥生時代に位置付けられるが、より詳細な時期は特定できない。

SD59

- 検出状況 IV区西東付近(第116図)、SD58に切れ、SD60を切っている。
- 形状・規模 溝の方向は北西から南東である。長さは2.62m検出された。幅は検出面で30~32cm、溝底で19~22cmを測る。断面はU字形で、検出面からの深さは8cmである。溝底の標高は北西端で6.76m、南東端で6.75mを測り、北西から南東方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況 灰黒色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物 器種不明の弥生土器が出土している。
- 時期 SD58以前に位置付けられる。

SD60

- 検出状況 IV区東隅付近に位置している(第116図)。SD59に切られている。
- 形状・規模 溝の方向は北東から南西である。長さは3.03m検出された。幅は検出面で28~37cm、溝底で20~24cmを測る。横断面は皿形で、検出面からの深さは5cmである。溝底の標高は北東端で6.78m、南西端で6.76mで、北東から南西方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況 埋土は、灰黄褐色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物 全く出土していない。
- 時期 SD59以前に位置付けられる。

SD61(図版109)

- 検出状況 IV区南東部で検出された(第116図)。SD62を切っている。Ⅲ区には続かない。
- 形状・規模 溝の方向は東側から西側であるが、半ば程で、直角に大きく屈曲している。長さは18m検出された。幅は検出面で2.08~5.18cm、溝底で1.90~4.95cmを測る。断面は平底の皿形を呈し、検出面からの深さは21cmである。溝底の標高は南東端で6.48m、北端で6.62m、南西端で6.59mを測り、中央部が最も高い。
- 埋没状況 暗灰色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物 661~663は須恵器である。661は坏Bである。推定口径13.8cm、器高4.05cmの中型の坏である。口縁部は直線的に開く。灰白色砂粒を多く含んでいる。662も高台部分を欠いているが、おそらく坏Bである。推定口径12.5cm、器高4.40cmの口径に対し器高が高い深手のタイプである。口縁部もやや外反気味に開く。663は高坏の脚部である。残存高6.35cm

で、長脚で透かしや段のないタイプである。内面にはシボリメがかすかに残る。粗砂・細砂を多量に含む。

時期 出土した遺物から飛鳥時代～奈良時代と思われる。

SD62

検出状況 調査区東端で検出された（第116図）。西端はSD61に切られている。
 形状・規模 溝の方向は南東から北西である。長さは8.50mが検出された。幅は検出面で60cm～1.03m、溝底で35～89cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは11cmである。溝底の標高で北西端で6.64m、南東端で6.57mを測り、北西方向から南東方向へ流れていたものと思われる。
 埋没状況 暗灰色シルト質極細砂1層からなる。
 出土遺物 サマカイトの剥片1gが出土している。
 時期 SD61との切り合い関係から、飛鳥時代～奈良時代以前と考えられる。

SD63（図版108 写真図版136）

検出状況 IV区南隅付近に位置している（第116図）。
 形状・規模 溝の方向は南東から北西である。長さは17.33m検出した。幅は検出面で41～63cm、底部で20～33cmを測る。断面は逆台形で、検出面からの深さは38cmである。溝底の標高は南東端で6.23m、北西端で6.14mを測り、南東から北西方向へ流れていたものと思われる。
 なお、当溝については、断面形態・埋土の特徴などから、SD13・SD83につながる可能性が考えられる。
 埋没状況 埋土は2層に分層でき、上層は灰黄褐色シルトないしシルト質極細砂、下層は暗灰黄色砂質シルトであり、下層でやや淀んだ流れの状況がうかがえる。
 出土土器 須恵器と土師器が出土している。
 須恵器 坏Bと甕が出土しているが、図化できたのは甕（642）1個体である。体部を叩き整形後、口縁部を横ナデ調整により仕上げている。
 土師器 643の碗が出土している。体部は内外面ともナデ調整により仕上げられている。
 時期 出土土器から判断して、平安時代と考えられる。

SD64

検出状況 IV区南隅付近（第116図）、SD63の南西に位置している。
 形状・規模 溝の方向は南東から北西である。長さは6.85m検出した。幅は検出面で66～89cm、底部で16～26cmを測る。断面は深いU字形で、検出面からの深さは54cmである。溝底の標高は南東端で6.12m、北西端で6.01mで、南東から北西方向へ流れていたものと思われる。
 埋没状況 埋土は5層に分層でき、上の2層は灰黄褐色シルト、3層は褐灰色シルト、下の2層は暗灰黄色シルトのラミナ及びシルト混じり細砂であり、1・2層の洪水砂とそれ以下で明瞭に異なっている。
 出土遺物 全く出土していない。

時期 土器をともなわないため、明確にできない。

SD65 (写真図版71)

検出状況 IV区中央部東よりに位置する(第116図)。SD71に切られ、SD66・SD68を切っている。SD100につながる可能性もある。

形状・規模 溝の方向は西から東である。長さは10.16mが検出された。幅は検出面で65cm～1.20m、溝底で26～84cmを測る。断面はU字形で、検出面からの深さは28cmである。溝底の標高は西端で6.77m、東端で6.63mであり、西から東へ流れていたものと思われる。

埋没状況 埋土は2層ないし3層に分層でき、上層は黒褐色シルト、下層は褐色シルト質極細砂であり、間に両者がブロック状に混じり合う部分がある。

出土遺物 全く出土していない。

時期 SD71・SD66・SD68との切り合い関係から、弥生時代後期～奈良時代と考えられる。

SD66 (図版108 写真図版71)

検出状況 IV区中央部東よりに位置する(第116図)。SD65・SD67に切られ、SD68を切っている。

形状・規模 溝はくの字形に屈曲しており、その方向は北西から南東そして東西方向である。長さは8mが検出された。幅は検出面で30～66cm、溝底で10～40cmを測る。横断面はU字形で、検出面からの深さは16cmである。溝底の標高は南東端で6.63m、屈曲部で6.65m、東端で6.68mであり、流れの方向は不明である。

埋没状況 暗赤褐色極細砂1層からなる。

出土土器 甕(645～647)と高坏(648・649)が出土している。

甕

645は、体部外面をハケ調整、体部内面をナデ調整、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。646は、底部内面をハケ調整、体部外面をナデ調整、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。

この他図化できなかったが、体部片も出土している。

高坏

口縁部片(648)と脚部(649)が出土している。648は、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。また体部外面はヘラ磨きにより仕上げられている。649は、脚部内面をナデ調整、端部を横ナデ調整により仕上げられている。

他

サヌカイトの剥片が6.5g出土している。

時期 出土土器から判断して弥生時代中期後半と考えられる。

SD67

検出状況 IV区中央部東よりに位置する(第116図)。SD66を切っている。

形状・規模 溝の方向は北西から南東である。長さは2.12mが検出された。幅は検出面で20～34cm、溝底で14～24cmを測る。断面はU字形で、検出面からの深さは21cmである。溝底の標高は北西端で6.74m、南東端で6.77mであり、北西から南東方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況 埋土は黒褐色シルト質極細砂である。

出土土器 壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。壺は、直口壺の把手

第5節 IV区の調査

が、甕は底部片が出土している。

時期 出土土器から判断して弥生時代中期後半と考えられる。

SD68

検出状況 IV区中央部東よりに位置する(第116図)。SD65・SD66・SD67に切られている。

形状・規模 溝の方向は北西から南東である。長さは2.12m検出された。幅は検出面で36~46cm、底部で18~30cmを測る。断面はU字形で、検出面からの深さは9cmである。溝底の標高は北西端で6.89m、南東端で6.86mであり、北西から南東方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物 弥生土器の甕の底部と器種不明の破片が出土している。

時期 SD65・SD66・SD67との切り合い関係および出土土器から、弥生時代中期後半と考えられる。

SD69

検出状況 IV区中央部北東壁際に位置する(第116図)。

形状・規模 溝の方向は南西から北東である。長さは1.95m検出された。幅は検出面で27~32cm、底部で10~14cmを測る。断面はU字形で、検出面からの深さは11cmである。溝底の標高は南西端で6.81m、北東端で6.77mであり、南西から北東方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物 器種不明の弥生土器の破片が出土している。

時期 出土土器から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

SD70

検出状況 IV区中央部から西隣付近まで流れている(第116図)が、一か所途切れている部分がある。SD86・SD101に切られている。

形状・規模 溝の方向は東から西である。長さは31.0mが検出された。幅は検出面で50cm~1.02m、溝底で16~70cmを測る。断面はU字形で、検出面からの深さは12~30cmである。溝底の標高は東端で6.62m、西端で6.49mであり、東から西方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況 埋土は3層に分層でき、上層は黒褐色極細砂、中層は黒褐色シルト質極細砂、下層は黒褐色極細砂~細砂である。

出土土器 壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

壺 体部片が出土している。

甕 体部片と底部片が出土しているが、いずれも弥生時代中期の特徴を示すものである。

時期 出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

SD71 (岡版108・109 写真図版136)

- 検出状況** 調査区中央で検出された(第116図)。北西端はSD70に切れ、SD72・SD100・SK19などを切っている。
- 形状・規模** 溝の方向は北西から南東である。37m検出された。幅は検出面で82cm~1.38m、溝底で25cm~1.18mを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは34cmである。溝底の標高は北西端で6.63m、南東端で6.44mであり、北西から南東へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 埋土は2層から3層に分けられ、粒子からみて徐々に埋没していったものと思われる。
- 出土遺物** 弥生時代前期と奈良時代の土器が出土している。
- 弥生前期** 壺と甕が出土している。
- 壺** 頸部片、体部片、底部片が出土しているが、図化できたのは底部(651~653)に限られる。底部片は、652の外面をハケ調整で仕上げている以外は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。いずれも胎土中に5mm以下の砂粒が多量に含まれている。その他、頸部片にはヘラ描沈線が認められる。
- 甕** 多条のヘラ描沈線が施された体部上半が出土している。小片のため図化できなかった。
- 奈良時代** 664は須恵器の坏Aである。口縁部の1/3程度の破片で、推定口径14.7cm。底部はやや丸底気味である。内外面に火ダスキがみられ、灰白色でやや軟質な焼けである。
- 他** 1.0gと3.2gのサヌカイトの剥片が出土している。
- 時期** 出土土器から判断して、奈良時代と考えられる。

SD72

- 検出状況** IV区中央部東寄りに位置し(第116図)、SD71に切られている。
- 形状・規模** 溝の方向は南西から北東である。長さは2.94m検出された。幅は検出面で32~44cm、溝底で16~26cmを測る。断面はU字形で、検出面からの深さは9cmである。溝底の標高は、南西端で6.74m、北東端で6.72mであり、南西から北東へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物** 器種不明の弥生土器の破片が出土している。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

SD73

- 検出状況** IV区東部に位置し(第116図)、SD72の南東をほぼ平行に流れる。
- 形状・規模** 溝の方向は南西から北東である。長さは2.25m検出された。幅は検出面で28~35cm、溝底で15~20cmを測る。断面は浅い皿形で、検出面からの深さは6cmである。溝底の標高は南西端で6.77m、北東端で6.74mであり、南西から北東へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物** 弥生土器の甕の体部の小片が出土している。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

第5節 IV区の調査

SD74

- 検出状況 IV区中央東寄りに位置し（第116図）、SD71の南西をほぼ平行に流れる。SD94を切っている。
- 形状・規模 溝の方向は北西から南東である。長さは3.00m検出された。幅は検出面で28～38cm、溝底で22～28cmを測る。断面は浅い皿形で、検出面からの深さは4cmである。溝底の標高は西端とも6.78mであり、流れていた方向は不明である。
- 埋没状況 黒褐色極細砂1層からなる。
- 出土遺物 全く出土していない。
- 時期 SD94との切り合い関係から、弥生時代中期後半以降と考えられる。

SD75

- 検出状況 IV区中央東よりに位置し（第116図）、SD71の南西をほぼ平行し、SD76を切る。
- 形状・規模 溝の方向は北西から南東である。長さは2.56m検出された。幅は検出面で17～20cm、溝底で18～30cmを測る。断面は浅い皿形で、検出面からの深さは4cmである。溝底の標高は北西端で6.79m、南東端で6.78mであり、北西から南東へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物 全く出土していない。
- 時期 SD76との切り合い関係から、弥生時代中期後半以降と考えられる。

SD76

- 検出状況 IV区中央東よりに位置し（第116図）、SD75・SD77・SD94に切られている。
- 形状・規模 溝は東から北西にやや屈曲している。長さは3.96m検出された。幅は検出面で45～61cm、溝底で22～45cmを測る。断面は皿形で、検出面からの深さは10cmである。溝底の標高は東端で6.82m、北西端で6.73mであり、東から北西方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況 黒褐色極細砂1層からなり、炭を含んでいる。
- 出土遺物 土器と石器が出土している。
- 土器 甕の底部片が出土している。
- 石器 サヌカイト製の石錐が出土している。石錐は完存しており、重さ2.5g。ほかにサヌカイトの剥片が2.5g出土している。
- 時期 出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

SD78

- 検出状況 IV区中央付近（第116図）、SD71の南西をほぼ平行に流れている。SD77・SD79に切られている。
- 形状・規模 溝の方向は南東から北西である。長さは5.80mが検出された。幅は検出面で28～40cm、溝底で16～22cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは8cmである。溝底の標高は南東端で6.78m、北西端で6.75mでありほとんど高低差がないが、して言えば南東から北西方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況 灰黄褐色極細砂～細砂1層からなる。
出土遺物 器種不明の弥生土器が出土している。
時期 SD77とSD79との切り合い関係および出土土器から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

SD79

検出状況 IV区中央付近（第116図）、SD77の北西側をほぼ平行に流れている。SD78を切っている。
形状・規模 溝の方向は南西から北東である。長さは3.10mが検出された。幅は検出面で27～32cm、溝底で14～20cmを測る。断面は皿形を呈し、検出面からの深さは8cmである。溝底の標高は南西端で6.73m、北東端で6.74mでありほとんど高低差がないが、して言えば南西方向から北東方向へ流れていたものと思われる。
埋没状況 黒褐色砂混じりシルト1層からなる。
出土遺物 器種不明の弥生土器の破片と須恵器の壺の口縁部が出土している。
時期 出土遺物から判断して、奈良時代と考えられる。

SD80

検出状況 IV区中央付近（第116図）、SD71の南西側をほぼ平行に流れている。SD100に切られている。
形状・規模 溝の方向は南東から北西であるが、南東端の手前で東向きに短く分岐している。長さは7.20m検出された。幅は検出面で30～44cm、溝底で20～25cmを測る。断面は皿形を呈し、検出面からの深さは10cmである。溝底の標高は南東端で6.74m、北西端で6.72mであり、ほとんど高低差がなく、して言えば南東から北西方向へ流れていたものと思われる。
埋没状況 灰黄褐色極細砂～細砂1層からなる。
出土遺物 器種不明の弥生土器の破片が出土している。
時期 出土土器から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

SD81

検出状況 IV区中央部の南西辺寄りで検出された（第116図）。SD83に切られている。
形状・規模 溝はかなり蛇行しているがおおよその方向は南東から北西である。16.9mを検出した。幅は検出面で57cm～1.08m、溝底で36～67cmを測る。断面は平底を呈し、検出面からの深さは11cmである。溝底の標高は南東端で6.71m、北西端で6.61mであり、北西方向へ流れていたものと思われる。
埋没状況 埴土は2層に分層でき、上層は灰色～黒褐色シルト質極細砂、下層はにぶい褐色シルト質極細砂である。
出土遺物 土器は弥生土器の壺や甕、須恵器の長頸壺やカキメのある胴部、古墳時代の須恵器の坏などが出土している。
時期 出土遺物から、奈良時代と考えられる。

SD82 (図版108)

- 検出状況** 調査区東側南端で検出された(第116図)。西側でSD83に切られ、東側でSD61に切られている。
- 形状・規模** 溝の方向は南東から北西である。長さは20.9mが検出された。幅は検出面で52cm～1.63m、溝底で38cm～1.33mを測る。断面は浅い皿形を呈し、検出面からの深さは10cmである。溝底の標高は南東端で6.72m、北西端で6.57mであり、南東方向から北西方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 灰色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物** 壺の底部片(650)1個体が出土している。内面はナデ調整により仕上げられている。胎土中にはわずかに砂粒が含まれている。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

SD83 (図版109 写真図版71)

- 検出状況** 調査区中央南端で検出された(第116図)。SD84・SD86・SD90に切られ、SD81・SD82・SD88・SD89・SD70を切っている。先述したように、SD13・SD63につながる溝と考えられる。
- 形状・規模** 方向は南東から北西である。31.6mを検出した。幅は検出面で55cm～1.05m、溝底で18～48cmを測る。断面は深い台形を呈し、検出面からの深さは47～84cmである。溝底の標高は南東端で6.16m、西北端で5.95mであり、南東から北西へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 基本的に埋土は4層に分けられ、最下層に灰色極細砂～細砂が堆積している以外は、いずれも人為的に埋め戻された状況を示している。しかし、任意に設定した土層観察用のアゼの1か所には、下層にラミナ状の堆積が確認され、その上に埋め戻された層が認められる。さらにこの箇所では、グライ化した部分が縦方向に認められ、枕が存在していた可能性が考えられる。このような堆積状況は、他の箇所では確認されておらず、あくまでも部分的なものであるが、埋め戻される以前にかつて流れのあった時が存在し、木が立ててあった可能性も考えられる。

- 出土遺物** 壺と甕が出土している。

壺

口縁部・頸部片・底部が出土している。図化できたのは口縁部(654・655)のみである。

654は、口縁部内面を横ナデ調整により、外面を指オサエの後ナデ調整により、頸部外面はハケ調整により、同内面はヘラケズリにより仕上げられている。胎土中には2mm大の砂粒が多量に含まれている。655は、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。また、口縁端部には1条のヘラ描沈線を描いた後、刻目を施している。この土器にも4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

この他、頸部片には多条の突帯が貼付けられている。



第117図 SD83出土壺

- 甕** 口縁部片、体部片、底部片が出土している。
- 口縁部** 逆し字形をなすものと知意形をなすものが出土しているが、図化できたのは前者の658のみである。頸部には2条のヘラ描沈線紋が施されている。また口縁部はナデ調整により仕上げられている。
- 体部** 半截竹管による山形紋が施されたもの(第117図)も認められる。
- 底部** 656と657の2個体を図化した。両個体ともナデ調整により仕上げられており、胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。また、657の底部中央よりややずれた位置に径8mmの穿孔が認められる。焼成前に穿孔されたようである。
- 時期** 出土土器から判断すると、弥生時代前期となる。しかし、これらの土器は埋土中に含まれる土壌層Ⅰのブロックに含まれるもので、周囲の土を埋め戻した際に混入したものと考えられる。したがって、SD82・SD86との切り合い関係から、弥生時代中期後半以降、奈良時代までの時期と考えられる。これは、SD13の報告で述べた時期とほぼ一致する。

SD84 (図版72・109 写真図版136)

- 検出状況** N区中央部に位置する(第116図)。SD86に切られ、SD65・SD83・SD81・SD100を切っている。
- 形状・規模** 溝の方向は北東から南西である。長さは11.8m検出された。幅は検出面で30~64cm、溝底で16~38cmを測る。断面はU字形で、検出面からの深さは31cmである。溝底の標高は北東端で6.46m、南西端で6.47mであるが、北東から南西へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 埋土は2層に分層でき、上層は暗青灰色極細砂、下層は灰色極細砂である。一部に黒褐色シルト質極細砂がたまっている部分がある。
- 出土遺物** 659は須恵器の坏Bの蓋である。内面は不定方向のナデで仕上げられている。
- 660は土師質の異形土器である。内側から穿孔した円孔が14穴頂部と体部の境をめぐっている。外面はナデないし雑なユビナデ、内面はハケメと板ナデで仕上げられている。なお、この土器に類似したものは、神戸市の日暮遺跡でも出土している。
- 図化した以外に、須恵器の壺・甕・皿・坏B、土師器の甕が出土している。
- 時期** 出土した遺物から奈良時代と考えられる。

SD85 (図版109)

- 検出状況** 調査区中央南端で検出された(第116図)。西端はSD86に切られている。
- 形状・規模** 溝の方向は北から南である。長さは2.50mが検出された。幅は検出面で39~55cm、溝底で7~20cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは32cmである。溝底の標高は北端で6.31m、南端で6.45mであり、南方向から北方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 埋土は2層に分けられ、粒子からみて徐々に埋没していったものと思われる。
- 出土遺物** 665は土師器の皿または坏である。口縁部が小片のため口径の復原は不可能である。内面には暗文がみとめられ、端部は丸く巻き込む。内外面はヨコナデで仕上げている。色調は橙色ないし淡黄色であり、極細砂を多く含む。
- 時期** 出土した遺物から奈良時代中頃と考えられる。

SD86 (図版110~111 写真図版72・137・138)

- 検出状況** IV区中央部西寄り調査区を横断して流れる(第116図)。SD70・SD83・SD84・SD90・SD91・SD100を切っている。
- 形状・規模** 溝の方向は南西から北東である。長さは22.2mが検出された。幅は検出面で1.87~2.78m、溝底で48~65cmを測る。断面はV字形で、検出面からの深さは89cmである。溝底の標高は南西端で6.37m、北東端で5.91mで、南東から北西方向へ流れていたことになる。
- 埋没状況** 埋土は7層~9層に分層したが、大きく4層に分けられる。上層は灰褐色系の極細砂、中層は黒褐色系のシルト質極細砂ないし細砂混じりシルト、下層はより濃い黒褐色シルト(ラミナ)、最下層は灰黄褐色系のシルトと細砂のラミナである。最下層は流水堆積であり、中・下層は流れが淀んだ状態、上層は洪水砂で一気に埋まった状況が考えられる。
- 出土遺物** 土師器と須恵器、瓦が出土している。
- 土師器** 供膳形態の坏、煮沸形態の甕、把手、貯蔵形態の甕が出土している。
- 坏** 667~670は土師器の坏Aである。667は推定口径11.9cm。口径に比べ底径が小さく、外傾度が大きい椀に近い形態である。外面はユビオサエのあとナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げている。口縁端部直下の内外面に沈線が巡り、端部は小さく丸くおさめている。淡赤橙色~鈍い橙で、口縁部付近に墨またはススが附着している。668は推定口径12.6cm。667より外傾度が小さい。器表面の剝離は著しく、器壁の厚みも薄い。口縁部の外面はヨコナデ、内面はミガキらしいものがみられる。底部は内外面ともユビオサエの後ナデである。
- 669~670は口縁部がほぼ直立するタイプである。669は推定口径14.8cmとやや大型である。口縁端部直下の内面に沈線が巡り、端部は小さく玉縁状になっている。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、外面はヘラケズリまたは板ナデである。極粗砂~細砂を多く含む。670は推定口径17.4cm。口縁端部は小さく丸くおさめている。底部外面はヘラケズリのちナデであるらしい。668~670は外面が橙で内面が灰白色である。
- 689~690も土師器の坏Aであるが、平安時代以降のものである。口縁部は内外ともヨコナデで、底部はユビオサエの後ナデである。器壁は薄い。どちらも外傾度が高く、口縁端部の微妙なつくりの違いを除き、非常に似ている。689は外面の一部にかなり濃くススが附着しており、灯明皿に利用された可能性がある。
- 甕** 693~694は土師器の甕の口縁部である。両者ともいわゆる長胴の甕と考えられる。693は反反して立ち上がる。端面はカットしてナデである。口縁部内面に粗いハケメが残る。694は内外面とも磨滅のため調整は不明である。
- 把手** 695は土師器の把手である。粘土紐を巻き上げて成形しており、内側が空洞になっている。全体の形状は角状で、放射状にナデつけている。本体の内面は斜め方向のユビナデがみられる。器種としては鍋が推定できる。余り類例のない特殊な形態である。
- 685は土師器の丸底の胴部である。類例が乏しく器種は不明であるが、いちおう甕としておく。著しく二次焼成を受けており、外面は剝離がいちじるしい。底部はユビオサエの後ナデで、周辺に草のようなものの圧痕が一部にみられる。体部外面はヨコナデか。内面は横方向のヘラケズリまたは板ナデとユビナデがみられる。細砂~細砂を多量に含む。

- 須恵器** 須恵器の器種には坏A・B、壺、碗などの供養形態と、貯蔵形態の壺がある。
- 壺** 671～673は杯の壺である。671は推定口径14.6cm、器高1.8cmと天井部が偏平なタイプである。つまみは中心より少しずれており、上面に棒状の圧痕がある。内面中心に仕上げナデがある。672・673は推定口径16.4～17.6cmで671よりやや大型である。672は天井部が高く、673は偏平なタイプである。673は内面に不定方向の仕上げナデがある。
- 坏 B** 674・675は坏Bである。674は推定口径14.8cm、残存高5.7cmとやや外傾する深手のものである。675は高台部分のみの破片である。推定高台径9.6cm。
- 坏 A** 676～681および686～688は坏Aである。口径の順に並べた。676は口縁部がほとんど直立するタイプである。口径11.2cm、器高3.5cm。677・678は口径13cm弱で、口縁部の外傾度も似通っている。678は内面に火ダスキがあり、器壁（特に底部外面）にクレーター状の刻離痕がある。679は推定口径14.0cm。底部が小さくやや外傾度が大きい。680・681は14.6～14.85cm、器高3.3cm前後で浅くて口径の広いタイプである。686～688はいずれも口径と底径の差が大きいため外傾度が大きく、器高は3.2～3.4cmと浅いタイプで、時期的に平安時代に下るものである。
- 墨書土器** 682は碗の高台で内面に大きく「東」または「萬」の墨書がある。高台は高く端部をつまみ出すていねいな作りである。粗砂を少量含むが比較的精良な粘土である。
- 壺** 683ははそうである。肩部の後に沈線がめぐる。底部はヘラ切りの後不定方向にナデしており平底に近く、全体に角張っている。頸部内面には細かいシボリメがみとめられる。孔を穿った際にはずれた粘土が内部に残っている。684はおそらく提瓶の口縁部である。推定口径4.8cm。端部はかるくつまむように先細りに仕上げる。
- 691は丸い肩部の壺である。腹径24.0cm、器高37.35cmと大型である。口縁端部は内側に折り返されている。底部はヘラ切り後ナデている。胴部下位の内面には粘土紐の継ぎ目がナデ消されずに残っている。また、外面下端はヘラケズリの後ナデている。
- 692は双耳壺である。突帯が2条が肩部にめぐり、その上に板状の耳がつく。口縁端部はつまみあげている。腹径17.2cm、器高28.0cmである。
- 瓦** 696・697は平瓦である。696は格子タタキで内面の布目を帯状に磨り消している。697は荒縄タタキで凹凸が著しく粗い作りである。「X」のヘラ書がある。
- 698は丸瓦である。内面に糸切り痕がのこる。
- 時期** 出土した遺物から奈良時代から平安時代と考えられる。

SD87

- 検出状況** 調査区西側で検出された（第116図）。SK33を切り、SK39・SD101に切られている。SD70につながるものと考えられる。
- 形状・規模** 溝の方向は東から西である。長さは16.1mが検出された。幅は検出面で34cm～1m、溝底で18～82cmを測る。断面は平底形を呈し、検出面からの深さは8cmである。溝底の標高は東端で6.51m、西端で6.44mで、東方向から西方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 灰色極細砂1層からなる。
- 出土土器** 壺と高坏と焼土塊が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

第5節 IV区の調査

壺	直口壺の口縁部が出土している。
高 環	脚部および体部と脚部の接合部が出土している。接合部は円板充塞法による。
時 期	出土土器から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

SD 8 8

検出状況	調査区西側で検出された（第116図）。柱穴・SD83に切られている。
形状・規模	溝の方向は東から西である。長さは11.9mが検出された。幅は検出面で48～90cm、溝底で24～68cmを測る。断面はV字形を呈し、検出面からの深さは8cmである。溝底の標高は東端で6.55m、西端で6.56mであり、わずかであるが西の方が高い。
埋没状況	灰色極細砂1層からなる。
出土遺物	壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。
壺	広口壺の口縁部が出土している。
甕	体部と底部が出土している。体部には多条のヘラ描沈線紋が描かれている。
時 期	出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SD 8 9

検出状況	IV区西半、南西辺寄りに位置する（第116図）。SD83・SD92に切られている。 溝の方向は西から東である。長さは12.0mが検出された。幅は検出面で53～90cm、溝底で26～84cmを測る。断面は皿形で、検出面からの深さは10cmである。溝底の標高は西端は6.57m、東端は6.49mであり、西から東へ流れていたものと思われる。
埋没状況	黒褐色砂質シルト1層からなる。
出土土器	壺のみが出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。広口壺の口縁部、頸部、底部が出土している。頸部のなかには、三角刺突紋を施したものと、7条+αのヘラ描沈線を描いたものが認められる。
時 期	出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SD 9 0（図版112 写真図版138）

検出状況	IV区中央部西寄りの南西辺付近に位置する（第116図）。SD83を切っている。
形状・規模	溝の方向は東から西である。長さは5.15mが検出された。幅は検出面で55～78cm、溝底で28～75cmを測る。断面は逆台形で、検出面からの深さは32cmである。溝底の標高は東端で6.47m、西端で6.41mであり、流れの方向は東から西である。
埋没状況	黒褐色細砂混じりシルト1層からなり、炭を含む。
出土遺物	699は上層より出土した須恵器の甕の口縁部である。1/4の破片で推定口径33.5cm、残存高16.6cm。口縁部中に2条の沈線をもぐらし、それより上に7条の櫛描波状紋をほどこす。口縁端部は水平にカットしている。頸部内面にはヘラ状工具の当たった痕がめぐる。胴部外面は平行タタキ、内面は同心円状の当て具痕が残る。 700は須恵器の甕の胴部である。胴部のみのため、傾き等は若干異なる可能性があるが、かなり大型の甕であることは間違いない。外面は平行タタキの上にカキメをほどこす。一

部に横方向の沈線状の工具痕がある。内面も同心円の当て具痕の上に横方向の沈線状の工具痕が残る。灰白色でやや軟質の焼けである。

時 期 出土した遺物から奈良時代と考えられる。

SD91 (図版112)

検出状況 調査区西側で検出された (第116図)。北側はSD86に切られている。

形状・規模 方向は東西方向である。長さは4.58mが検出された。幅は検出面で58-66cm、溝底で28-30cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは20cmである。溝底の標高は東端で6.51m、西端で6.53mであり、若干であるが西側の方が高い。

埋没状況 暗灰色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物 701は土師器の甕である。推定口径19.6cmで、中型の甕である。直立に近い縁部は端部付近で外反する。端部は丸くおさめている。胴部は張らず、外面に粗いハケメが薄く残る。内面は粘土柱の継ぎ目が一部残る。

時 期 出土した遺物から奈良時代前半以前と考えられる。

SD92

検出状況 IV区西半、南西辺寄りに位置する (第116図)。SD89を切っている。

形状・規模 溝の方向は北東から南西である。長さは2.68mが確認された。幅は検出面で33-80cm、溝底で20-53cmを測る。断面はU字形で、検出面からの深さは18cmである。溝底の標高は北東端で6.56m、南西端で6.51mで、北東から南西方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況 黒褐色シルト1層からなる。

出土遺物 奈良時代の須臾器の坏・蓋、土師器の坏がある。また九瓦および器種不明の弥生土器も出土している。

時 期 出土した遺物から奈良時代と考えられる。

SD93 (図版112 写真図版139)

検出状況 調査区西側で検出された (第116図)。柱穴を切っている。

形状・規模 溝の方向は東から西である。2.82mを検出した。幅は検出面で65-80cm、溝底で30-50cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは24cmである。溝底の標高は東端で6.49m、西端で6.51mであり、西側が若干高い。

埋没状況 埋土は2層に分けられ、粒子からみて徐々に埋没していったものと思われる。

出土土器 壺と甕が出土しているが、壺はいずれも小片のため図化できなかった。

壺 頸部片と体部片が出土している。頸部片には4条のヘラ描沈線紋が認められる。

甕 いずれも口縁部片が出土しており、逆し字形をなすもの(703)と如意形をなすもの(704-707)の2タイプが認められる。

703は、口縁部を横ナデ調整、体部内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。外面のハケ調整後、頸部直下から体部上半にかけて6条(上側)と5条(下側)のヘラ描沈線を描き、この沈線の間に2条からなる山形のヘラ描沈線紋を描いている。た

第5節 IV区の調査

だし、山形紋の沈線と直線紋の沈線とは異なることから、山形紋については半截竹管によるものとも考えられる。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

704は、体部内外面とも磨滅のため調整法を観察することは困難であるが、頸部付近にわずかにハケ調整を観察することができる。そして、このハケ調整後、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げている。

この他、706の外面にはヘラ描沈線は施されていない。707の外面には5条のヘラ描沈線が施されている。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SD94 (図版109)

検出状況 IV区中央部東寄りに位置し(第116図)、SD76を切っている。

形状・規模 溝の方向は北東から南西である。長さは2.10m検出された。幅は検出面で35~41cm、溝底で16~23cmを測る。断面は皿形で、検出面からの深さは6cmである。溝底の標高は北西端で6.73m、南東端で6.74mで、ほとんど差がなく、流れていた方向は不明である。

埋没状況 黒褐色砂質シルト1層からなる。

出土遺物 甕の口縁部片(666)が出土している。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

SD95 (図版112)

検出状況 IV区西半、北東辺寄りに位置する(第116図)。

形状・規模 溝の方向は東から西である。長さは9.85mが検出された。幅は検出面で28cm~1.27m、溝底で12~50cmを測る。断面は皿形で、検出面からの深さは11cmである。溝底の標高は東端で6.71m、西端で6.36mであり、東から西北方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況 灰褐色シルト質極細砂1層からなる。

出土土器 須恵器の椀の底部(702)1点のみが出土している。

時期 出土土器から判断して、11世紀後半と考えられる。

SD96 (図版113 写真図版139)

検出状況 IV区西部に位置する(第116図)。SD97を切り、SK30に接している。

形状・規模 溝は大きく蛇行し、幅も一定でない。おおよその方向は北西から南東である。長さは6.50mが検出された。幅は検出面で58cm~1.30m、溝底で40cm~1.05mを測る。断面は浅い皿形で、検出面からの深さは10cmである。溝底の標高は北西端で6.64m、南東端で6.59mであり、北西から南東方向に流れていたものと思われる。

埋没状況 暗灰色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物 壺と甕が出土している。

壺 広口壺の口縁部(713)と体部片(717)および底部片(714・715)が出土している。

713は、内外面をナデ調整により仕上げられている。頸部には4条(部分的に5条)のヘラ描沈線が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

714は磨減が著しく、内外面の調整は観察できない。715も、内面は磨減のための調整は観察できないが、外面はハケ調整とナデ調整により仕上げられている。

717は体部中位から肩部以下まで残存するものである。内面はナデ調整により、外面はハケ調整により仕上げられている。ハケ調整後、中位より若干上側に5条のヘラ描沈線が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

壺 口縁部と底部が出土している。

口縁部は逆し字形をなすものと、如意形をなすものが出土しているが、図化できたのは逆し字形のものに限られる(718・719)。718は、口縁部内外面を横ナデ調整により、体部内面をナデ調整により仕上げている。外面については観察できない。頸部直下には3条のヘラ描沈線が施されている。719は内外面ともナデ調整により仕上げられている。頸部直下には11条±αの半截竹管による沈線が施されている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

底部は、図化できたのは716の1個体である。内外面とも磨減のための調整法は明確にできない。中央部に径2cmの穿孔が認められる。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SD97

検出状況 IV区西部に位置する(第116図)。SD96・SD98に切られている。

形状・規模 溝の方向は北東から南西である。長さは7.50mが検出された。幅は検出面で22~36cm、溝底で5~18cmを測る。断面はU字形で、検出面からの深さは8cmである。溝底の標高は北東端で6.79m、南西端で6.73mで、北東から南西方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況 暗灰色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物 器種不明の弥生土器の破片が出土している。

時期 出土土器から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

SD98 (写真図版71)

検出状況 IV区北隅からV区に向かって流れている(第116図)。SD97を切っている。この溝の大部分はV区にあるため、詳細については第6節(286ページ)で報告する。

SD99 (図版112 写真図版139)

検出状況 調査区西側で検出された(第116図)。南端はSK34・SK45・SB26・SD101に切られている。

形状・規模 溝の方向は北から南西である。長さは5.55m検出された。幅は検出面で90cm~1.50m、溝底で48cm~1mを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは18cmである。溝底の標高は北端で6.22m、南西端で6.54mで、南西から北へ流れていたものと思われる。

出土遺物 土器と石器が出土している。

土器 壺と甕が出土している。

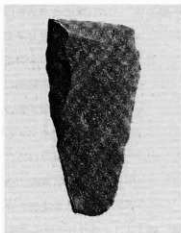
壺 頸部と体部片が出土しているが、図化できたのは711の頸部片1点である。

711は、広口壺の頸部と考えられるが、6条+αの突帯が貼り付けられている。内面は指オサエとナデ調整により、外面は横ナデ調整により仕上げられている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

この他の頸部片には、多条のヘラ描沈線を施したのも出土している。また、体部片についても、多条の突帯を貼り付けたものが出土している。

壺 口縁部片と底部片が出土している。

口縁部片は逆し字形をなすものと、如意形をなすものが出土しているが、図化できたのは前者の逆し字形のタイプ(708・712)に限られる。708は、口径31.2cmと大型の壺で、口縁部は横ナデ調整、体部内面は指オサエとナデ調整、外面はハケ調整により仕上げられている。ハケ調整後、頸部直下には3条のヘラ描沈線が描かれている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。712は、口径が復元できないほどの小片であり、また磨滅が著しいため内外面の調整は観察できない。また、ヘラ描沈線も認められない。



第118図 S97

底部は2点(708・709)図化した。2点とも内外面をナデ調整により仕上げられている。

石器 S97は図化していないが、サヌカイト製の打製石剣の基部の破片である。現存の長さ7.85cm、幅3.8cm、厚さ11.5mm、重さ37.73gである。

時期 出土土器から、弥生時代前期後半と考えられる。

SD100 (図版113 写真図版184)

検出状況 IV区中央部に位置する(第116図)。SD80を切り、SB18・SD71・SD84に切られている。SD65とつながる可能性がある。

形状・規模 溝の方向は北西から南東である。長さは9.90mが検出された。幅は検出面で60~68cm、溝底で26~38cmを測る。断面はU字形で、検出面からの深さは20cmである。溝底の標高は両端とも6.57mで、流れていた方向は不明である。

埋没状況 黒褐色シルト質細砂1層からなる。

出土遺物 石器が出土している。

S71は砥石である。平面形は台形で、全ての面がていねいに研磨されている。石材は凝灰質砂質泥岩で、灰色~灰白色のきめの細かい石である。長さ3.85cm、幅2.5cm、厚さ1.35cm、重さ23.5g。

時期 SD80とSD84との切り合い関係から、弥生時代中期後半以降、奈良時代までと考えられる。

SD101

検出状況 IV区西隅で検出された(第116図)。北端はSK45に切れ、SD87を切っている。

形状・規模 溝の方向は北西から南東である。長さは1.61m検出された。幅は検出面で50~65cm、溝

	底で30cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは17cmである。溝底の標高は北西端は6.38m、南東端は6.42mで、南東方向から北西方向へ流れていたものと思われる。
埋没状況	埋土は2層に分けられ、粒子からみて徐々に埋没していったものと思われる。
出土土器	壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。
壺	広口壺の口縁部と頸部片が出土している。頸部片には、6条のヘラ描沈線が施されている。半截竹管による可能性も考えられる。
甕	如意形を呈する口縁部片が出土している。頸部直下にはヘラ描沈線が描かれている。
時期	出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

4. 第3面の調査

(1) 概要 (図版114 写真図版73・74)

概要 24基の土坑、3本の溝、若干の柱穴群を検出している。遺構は全域に散漫に分布しているが、調査区中央部付近に土坑や柱穴が比較的集中しており、東端付近には柱穴が広く分布している。また、3本の溝は調査区西隅付近に位置し、南北方向に平行して流れている。互いの溝の間隔も同じくらいである。柱穴群については、建物を復元することはできなかった。このため、遺物の出土した柱穴についてのみ報告する。

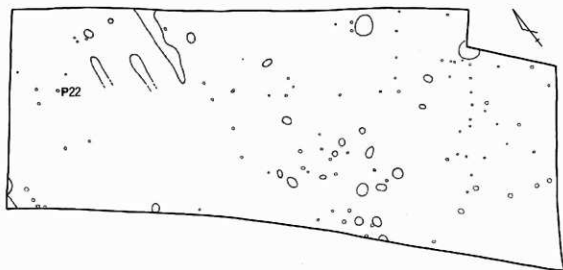
時期 遺構から出土した遺物は少量で、時期は弥生時代前期に限られる。



第119図 IV区第3面

(2) 調査の結果

I. 柱 穴



第120図 IV区第3面 柱穴

P 2 2 (図版115)

出土土器

点と堯が出上している。

壺

広口壺 (720) の口縁部が出土している。内面はナデ調整により、外面はハケ調整により仕上げられている。口縁端部には、刻みを施した後1条のヘラ描沈線紋が描かれている。また、頸部付近には6条+αのヘラ描沈線紋が描かれている。

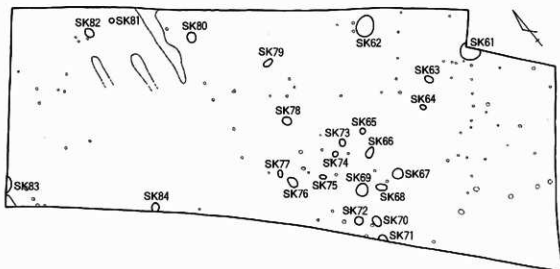
甕

如意形をなす口縁部片 (721) である。口縁部内外面および体部内面はナデ調整により、体部外面はハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。

時 期

出土土器から判断して弥生時代前期と考えられる。

II. 土 坑



第121図 IV区第3面 土坑

SK 61 (図版115・116 写真図版75・141)

検出状況 調査区の東隅に位置し(第121図)、一部調査区外へひろがっている。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模 平面形は隅丸方形で、長軸方向で2.38m、その直交方向で2.06mを測る。横断面は台形を呈し、最深部における検出面からの深さは27cmを測る。長軸はN80°Eを指向する。底部での規模は、長軸方向で1.96m、短軸方向で1.56mである。

埋没状況 暗灰色極細砂と、最下層に黑色シルト質極細砂が堆積していた。

遺物出土状況 壺・甕が出土している。いずれもやや上層から出土しており、意図的に完形品を置いた状態は認められず、いずれの個体も破片で散在して出土している(第122図)。

出土土器 土器と石器が出土している。

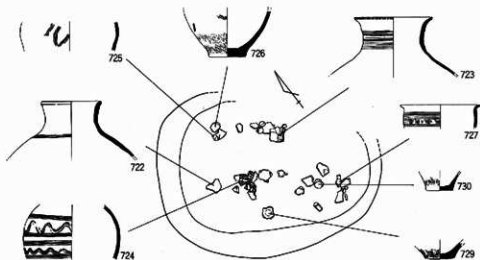
土器 壺と甕が出土している。

壺 口縁部片(722・723)、体部片(724・725)、底部片(726)が出土している。

722は、口縁部形態が大口甕というより直口壺に近い。口縁部内外面は横ナデ調整により、体部内面は指ナデ調整により仕上げられているが、体部外面については磨滅のため観察はできない。頸部下に6条のヘラ描沈線紋が描かれている。磨滅のため十分な観察はできないが、ヘラ先を櫛状に束ねて施文された可能性も否定できない。

723は、口縁部内外面および体部外面をナデ調整により仕上げられている。また体部内面は指オサエにより仕上げられている。口縁部には刻み目が施されている。頸部には、1条のヘラ描沈線紋と4条の櫛描紋のセットが5セット描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

724は体部中位付近のみ残存する。内外面ともナデ調整により仕上げられている。外面には、ヘラ先を櫛状に束ねたものによる直線紋と波状紋が描かれている。まず、6条を1単位とした直線紋を4帯描き、上から1帯目と2帯目の間および3帯目と4帯目の間に4条を1単位とする波状紋を描いている。このため、部分的に波状紋が直線紋の上に描かれている箇所が観察できる。直線紋は水平方向には描かれておらず、回転台を使用していないものと考えられる。なお、最も下側の直線紋は下端を欠くため3条しか残存しないが、



第122図 SK61土器出土位置

本来は6条からなるものと考えられる。また、波状紋についても、上側と下側ではその振幅等は一定していない。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

725も体部中位付近の小片である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。外面には5条を単位としたヘラ先を櫛状に束ねたものによる波状紋の一部と考えられる沈線が描かれている。土器の色調および胎土の特徴が724と類似しており、724と同一個体の可能性も考えられる。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

726は底部から体部下半まで残存する個体である。底部付近の外面はハケ調整により仕上げられているが、他の部位については磨滅の為観察できない。体部中位付近に、725と類似した波状紋の一部と考えられる沈線が認められる。施文原体も同じものと考えられる。また、色調・胎土上の特徴が724・725と類似し、これらと同一個体の可能性が考えられる。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

甕 口縁部片(727)と底部片(728-730)が出土している。

727は、口縁部を指オサエにより、体部内外面をナデ調整により仕上げられている。外面頭部直下には4条を1単位とする櫛描直線紋3帯と櫛描波状紋1帯が描かれている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

728は、底部内外面を指オサエの後ナデ調整、体部内外面をナデ調整により仕上げられている。

729・730は、底部内外面を指オサエの後ナデ調整により、体部外面をハケ調整により仕上げられている。これらの胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。



第123図 S96

石器 S96(第123図)は固化していないが、サヌカイト製の刃器の一部である。現存長6.2cm、幅6.25cm、厚さ1.5cm、重さ56.7gである。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期末-中期初頭と考えられる。

SK62(図版116)

検出状況 IV区中央東寄り北東辺付近に位置する(第121図)。

形状・規模 平面形は隅丸方形で、長軸方向で2.20m、短軸方向で1.92mを測る。横断面は皿形で、最深部における検出面からの深さは11cmを測る。長軸はN40°Eを指向する。

埋没状況 埋土は4層に分層できるが、上下ではなく平面的に分かれている。半分は灰黄褐色シルト質極細砂、残りの大部分は暗灰黄色極細砂である。

出土土器 鉢2個体(731・732)が出土している。

731は、口径27.6cmを測る大型の鉢である。口縁部内外面および体部内面は指オサエの後ナデ調整により仕上げられている。体部外面はハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

732は、口径14.7cmを測る小型の鉢である。口縁部内外面は指オサエの後ナデ調整、体

部内面はナデ調整により仕上げられている。体部外面は磨滅のため観察できない。口縁部直下外面には、3条と1条からなるへら描による波状紋が描かれている。直線紋・波状紋ともに稚拙な描き方で、回転台は使用されていないものと考えられる。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。



第124図 SK62出土土器 (732)

時期 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。

SK63

検出状況 調査区やや東側に位置し(第121図)、SK61とSK64の間で検出された。切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で92cm、その直交方向で68cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは10cmを測る。長軸はN33°Eを指向する。底部での規模は長軸方向で72cm、その直交方向で50cmを測る。

埋没状況 褐灰色極細砂1層からなる。

出土遺物 全く出土していない。

時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SK64

検出状況 調査区やや東側、SK63の南西側に位置する(第121図)。切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で66cm、その直交方向で48cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは30cmを測る。長軸はN33°Eを指向する。底部での規模は長軸方向で42cm、その直交方向で25cmを測る。

埋没状況 3層からなる。いずれもシルト質極細砂～極細砂が堆積しているが、2層目は第3面の基盤となっている黄灰色極細砂が混ざっている。

出土遺物 土器の小片が出土しているが、器種は特定できない。

時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SK65

検出状況 IV区中央東寄りの比較的遺構が集中する部分に位置する(第121図)。

形状・規模 平面形は円形で、長軸方向で70cm、短軸方向で66cmを測る。横断面は皿形で、最深部における検出面からの深さは10cmを測る。

埋没状況 黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。

出土遺物 全く出土していない。

時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SK66

- 検出状況 IV区中央東寄り、SK65の南に位置する（第121図）。
- 形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で1.26m、短軸方向で68cmを測る。横断面は皿形で、最深部における検出面からの深さは10cmを測る。長軸はN30°Wを指向する。
- 埋没状況 灰黄褐色シルト混じり極細砂1層からなる。
- 出土遺物 出土していない。
- 時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SK67

- 検出状況 調査区中央の土坑群のうち最も東側に位置する（第121図）。切り合い関係にある遺構は認められない。
- 形状・規模 平面形は隅丸方形で、長軸方向で1.20m、その直交方向で1.09mを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは18cmを測る。長軸はN40°Eを指向する。底部での規模は長軸方向で86cm、その直交方向で79cmを測る。
- 埋没状況 灰色極細砂1層からなる。
- 出土遺物 壺の底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK68

- 検出状況 IV区中央東寄り、SK66の南に位置する（第121図）。
- 形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で80cm、短軸方向で65cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは14cmを測る。長軸はほぼ南北方向を指向する。
- 埋没状況 黄灰褐色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物 全く出土していない。
- 時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SK69

- 検出状況 IV区中央東寄り、SK68の西に位置する（第121図）。
- 形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で1.38m、短軸方向で1.20mを測る。横断面は皿形で、最深部における検出面からの深さは7cmを測る。長軸はN50°Eを指向する。
- 埋没状況 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物 全く出土していない。
- 時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SK70

- 検出状況 IV区中央東寄り南西辺付近、SK69の南に位置する（第121図）。
- 形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で1.20m、短軸方向で77cmを測る。横断面は皿形で、最深

第5節 IV区の調査

部における検出面からの深さは12cmを測る。長軸はN5°Eを指向する。

- 埋没状況 灰褐色シルト質極細砂1層からなる。
出土遺物 全く出土していない。
時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SK71

- 検出状況 IV区中央南寄り、SK70の南に位置する(第121図)。側溝に切られている。
形状・規模 平面形はおそらく楕円形と考えられ、長軸方向で70cm残存し、短軸方向で93cmを測る。横断面は浅い逆台形で、現存の最深部における検出面からの深さは22cmを測る。
埋没状況 褐灰色シルト1層からなり、炭を含んでいる。
出土遺物 壺あるいは甕の体部片が出土しており、703と同様、上下に3条+αのヘラ指沈線を施した間に半截竹管による山形紋が描かれている。
時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK72

- 検出状況 IV区中央東寄り南西辺付近、SK70の北西に位置する(第121図)。
形状・規模 平面形は円形で、長軸方向で94cm、短軸方向で82cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは11cmを測る。長軸はN25°Eを指向する。
埋没状況 灰黄褐色シルト質極細砂1層からなる。
出土遺物 全く出土していない。
時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SK73

- 検出状況 IV区中央東寄り、SK65の北西に位置する(第121図)。
形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で82cm、短軸方向で62cmを測る。横断面は皿形で、最深部における検出面からの深さは4cmを測る。長軸はN15°Eを指向する。
埋没状況 灰褐色シルト質極細砂1層からなる。
出土遺物 全く出土していない。
時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SK74

- 検出状況 IV区中央東寄り、SK73の南西に位置する(第121図)。
形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で68cm、短軸方向で58cmを測る。横断面は皿形で、最深部における検出面からの深さは5cmを測る。長軸はN50°Eを指向する。
埋没状況 灰黄褐色シルト質極細砂1層からなる。
出土遺物 全く出土していない。
時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SK75

- 検出状況 IV区中央東寄り、SK74の北西に位置する（第121図）。
- 形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で70cm、短軸方向で47cmを測る。横断面は皿形で、最深度における検出面からの深さは6cmを測る。長軸はN45°Wを指向する。
- 埋没状況 灰黄褐色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物 全く出土していない。
- 時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SK76

- 検出状況 IV区中央部、SK75の北西に位置する（第121図）。
- 形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で1.30m、短軸方向で86cmを測る。横断面は皿形で、最深度における検出面からの深さは7cmを測る。長軸はN10°Wを指向する。
- 埋没状況 灰黄褐色砂混じりシルト1層からなる。
- 出土遺物 全く出土していない。
- 時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SK77

- 検出状況 IV区中央部、SK76の北に位置する（第121図）。
- 形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で84cm、短軸方向で50cmを測る。横断面は皿形で、最深度における検出面からの深さは5cmを測る。長軸はN30°Eを指向する。
- 埋没状況 灰黄褐色砂混じりシルト1層からなる。
- 出土遺物 全く出土していない。
- 時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SK78

- 検出状況 IV区中央部、SK77の北東に位置する（第121図）。
- 形状・規模 平面形は円形で、長軸方向で96cm、短軸方向で82cmを測る。横断面は皿形で、最深度における検出面からの深さは10cmを測る。長軸はN40°Wを指向する。
- 埋没状況 黒褐色砂混じりシルト1層からなる。
- 出土遺物 全く出土していない。
- 時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SK79（図版116 写真図版75）

- 検出状況 IV区中央部、SK78の北東に位置する（第121図）。
- 形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で1.10m、短軸方向で56cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深度における検出面からの深さは29cmを測る。長軸はN85°Eを指向する。
- 埋没状況 4層に分層でき、第1層は灰色シルト質極細砂、第2層は暗灰色シルト質極細砂、第3層は灰色極細砂、第4層は暗灰色シルト混じり極細砂である。

第5節 IV区の調査

出土土器 壺のみが出土している。頸部片と底部が出土しているが、図化できたのは733の底部のみである。733は、内外面ともハケ調整により仕上げられている。頸部片には多条の突帯が貼り付けられている。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK80

検出状況 IV区中央部西寄りに位置する（第121図）。

形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で1.11m、短軸方向で90cmを測る。横断面は浅い皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは6cmを測る。長軸はN10°Wを指向する。

埋没状況 灰黄褐色砂質シルト1層からなる。

出土遺物 全く出土していない。

時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SK81（写真図版75）

検出状況 IV区中央部西隅付近に位置する（第121図）。

形状・規模 平面形は円形で、長軸方向で48cm、短軸方向で36cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは11cmを測る。長軸はN50°Wを指向する。

埋没状況 灰黄褐色砂質シルト1層からなる。

出土遺物 壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

壺 体部片が出土している。

甕 体部の上半部が出土している。ヘラ描沈線紋が描かれている。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK82

検出状況 IV区中央部西隅付近、SK81の北西に位置する（第121図）。

形状・規模 平面形はおそらく隅丸方形で、残存している部分は長軸方向で1.03m、短軸方向で74cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは14cmを測る。長軸はN35°Wを指向する。

埋没状況 黒褐色砂混じりシルト1層からなる。

出土遺物 全く出土していない。

時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SK83

検出状況 調査区の西隅付近に位置し（第121図）、側溝に切られている。

形状・規模 平面形はおそらく楕円形ないし円形で、残存している部分は長軸方向で2.08m、短軸方向で64cmを測る。横断面はおそらく皿形で、最深部における検出面からの深さは10cmを測る。

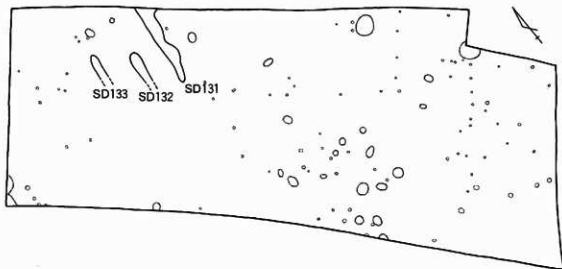
埋没状況 褐灰色シルト混じり細砂1層からなる。

- 出土遺物 全く出土していない。
 時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SK84

- 検出状況 調査区の中央部西寄り南西辺際に位置し（第121図）、掘溝に切られている。
 平面形はおそらく楕円形で、残存している部分は長軸方向で1.03m、短軸方向で70cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは12cmを測る。長軸はN45°Eを指向する。
 埋没状況 灰褐色細砂混じりシルト1層からなる。
 出土遺物 全く出土していない。
 時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

Ⅲ. 溝



第125図 IV区第3面 溝

SD131

- 検出状況 IV区西半の北東辺付近に位置する（第125図）。
 形状・規模 溝の方向は北から南である。長さは19.40mが検出された。幅は検出面で60cm～1.52m、溝底で38cm～1.23mを測る。断面は浅い皿形を呈し、検出面からの深さは9cmである。溝底の標高は北端で6.35m、南端で6.34mであり、あまり高低差はないが、北から南へ流れていたものと思われる。
 埋没状況 埋土は灰黄褐色シルト混じり極細砂である。
 出土遺物 全く出土していない。
 時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

第5節 IV区の調査

SD132

- 検出状況 IV区の北、SD131の西側を平行に流れる（第125図）。
- 形状・規模 溝の方向は北から南である。長さは2.60mが検出された。幅は検出面で90cm～1.18m、溝底で70～94cmを測る。断面はごく浅い皿形で、検出面からの深さは7cmである。溝底の標高は両端とも6.35mで、流れていた方向は不明である。
- 埋没状況 埋土は灰黄褐色シルト混じり極細砂である。
- 出土遺物 全く出土していない。
- 時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。

SD133

- 検出状況 IV区の北、SD132の西側を平行に流れる。
- 形状・規模 溝の方向は北から南である。長さは2.94mが検出された（第125図）。幅は検出面で62～82cm、溝底で46～68cmを測る。断面は皿形を呈し、検出面からの深さは12cmである。溝底の標高は北端で6.32m、南端で6.32mであり、南から北西方向へ流れていることになる。
- 埋没状況 埋土は灰黄褐色シルト混じり極細砂である。
- 出土遺物 全く出土していない。
- 時期 第3面で検出した遺構であることから、弥生時代前期と考えられる。